
勇者って一人じゃないんですか？

Kelten

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

勇者って一人じゃないんですか？

【Nコード】

N1157Y

【作者名】

K e l t e n

【あらすじ】

ドラゴンクエストの世界に勇者は一人しかいないのか？

ラダトーム城の兵士（転生者）は勇者の物語に深く関わっていく。

プロローグ

「勇者って一人じゃないんですか？」

ラダトーム城の謁見室に俺の素朴な質問が響いた。

人間は理解しあえるんだ。うん、今理解できた。だってみんな目が言ってる。

（お前はだまれ！）

そして俺は勇者5人の謁見が終わるまで黙って立っていた。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

俺の名前はケルテン ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士である。まだ新任の為任務が何なのか知らないが権限だけはすごい。王様と国務大臣以外の命令を拒否できるうえ、城の中に立ち入れない場所はほとんどない。

俺がこの世界がアレフガルドと認識したのは10年前、何の脈絡もなくこの世界がドラゴンクエストの世界だと認識した。平和な時代で400年ほど前に大魔王が現れロトの勇者が退治したという伝説がある。つまり近い未来に竜王が現れる。そう理解した俺はそれに備え自らを鍛えた。そう自分を育ててくれた湖上都市リムルダー

ルを守れるぐらいに。で何の因果かラダトーム城で兵士をやっている。しかも勇者の謁見とはこの物語の最高の見せ場だと張り切っていた。

ちなみに俺の位置は下の通り特等席である。

- - - - -
近衛隊長 近衛 近衛 近衛

王様 勇者

- - - - -
国務大臣 俺 近衛 近衛

プロローグ（後書き）

見切り発車

準備

時は5時間ほど前に遡る。

ラダトーム城兵士宿舎 食堂

俺はいつも朝のトレ・ニングの後食事をする。

食事の後は王室図書館にて史書を漁り、知識を貯める。

昼からは新任の挨拶周りをするのがここ一ヶ月の日課だ。

でも今日は違った。食事の最中、近衛のサイモンがやってきた。

「おついたいた。お前昼からの謁見に立てって命令だ。大臣からの伝言な。」

こいつは不良近衛騎士のサイモン。見た目は金髪碧眼で美形、さらに貴族の三男坊のくせに少し残念なやつだ。一度俺と衝突してから俺お前の仲だ。

「おい、なんか失礼なこと考えていないか？」

「あれっ顔にでてたか。で、王様への謁見は近衛騎士が立つのが決まりじゃないのか？」

「お前なあ。まあいい、今日は勇者の謁見だからな。大臣の隣につけよ。」

「とうとう勇者のお出ましか。いや光栄なことだな。」

「そうか？まっ人それぞれだからな。昼の謁見15分前に控え室に集合な、典礼用の装備で。」

「まじか！典礼用装備。あれ嫌いなんだけど。」

典礼用装備。鉄の鎧、鉄の槍、鉄の盾、腰に鉄の剣のフル装備で総重量20kg以上、しかも無駄に豪華な作りをしている。

「俺は好きだけだな。いかにも騎士って感じだろ。」

「お前はムキムキだからな。俺みたいな軽装備にはきつい。」

「どうせ立っているだけだ。じゃまた後でな。」

他人事だと思って勝手なことを言う。俺の戦闘スタイルは革鎧に両片手刀で魔法の併用だ。しょうがないから今日はいいとして、次の為に典礼用の革鎧を用意しよう大臣に頼もうかな。

おお勇者ロトの志を継ぎし者よ

「勇者ガルドどの、ご入場」

謁見室に勇者の入場を告げる声が響き、黒髪短髪、身長2m弱、ごつい体の男が入ってくる。しずしずと歩み寄り王座の手前で片膝をつく。

「勇者ガルド、まかりこしました。」

ブラボー！！なんて感動的なシーンだ。俺はこの場にあることを精霊ルビスに感謝する。

「おお勇者ロトの志を継ぎし者よ、よくぞ来てくれた。」

あれ？なんかセリフがおかしいぞ。志？ 血じゃないの？

「今アレフガルドは、竜王によって光を奪われ絶望の下にある。そなたがまことの勇者なら竜王を倒し光の玉を取り戻してくれ。なお勇者への支援に関しては大臣より仔細説明をうけよ」

俺の横で大臣が一步前にでて説明を始めた。

「今ラダトーム王家ラルス16世の名において勇者ガルドとの契約が成された。

一つ、ラダトーム王家は準備金として100ゴールドを勇者に与える。

一つ、ラダト・ム王家は勇者の生命に対してできる限りの支援を行なう。なお血の契約において生命失　　われしときでも蘇生が可能である。

一つ、勇者はラダト・ム王家御用達の宿屋、武器屋、道具屋において割引サービスを受けることがで　　きる。

一つ、勇者は王家準騎士として扱う。なお装備品として同等のものを所持する権利も与えられる。

一つ、勇者が獲得したモンスター素材は王家が専属で買い上げる。

一つ、・・・・・・・・・・・・・・・・

（なんだこれ？いやに生々しい契約だな。血の契約ってなんだ？割引サービス？買取？俺は混乱しているようだ。まだ大臣が何か言っているようだが何も聞こえない。というか聞きたくない。あゝ　あゝ　何も聞こゝえゝないゝいゝ）

ふと我にかえると勇者が大臣の差し出した紙に血判を押している。

「最後に王は公人ゆえに口にできぬが、さらわれし王女ロ・ラの命を案じて折られる。もしそなたが姫を助けてきたならば、臣下にして最高の恩賞が与えられるであろう。では行くがよい勇者ガルドよ」

そして勇者が退出していく。なんと言うか想像していたのとは違うが儀式は終わった。と思った。

「では次の勇者を入れよ」

「勇者ドゥーマンどの、ご入場」

で冒頭の一言「勇者って一人じゃないんですか？」

勇者支援官 兼 査察官って何？

今俺の前で大臣が怒って怒鳴っている。

「もう少しで台無しになるところだったのだぞ、次の勇者の耳に入らなかったからよかったものを。」

「まあまあ大臣殿、ケルテンも知らずに口に下までのことだし、大事には至らなかったのですからよろしいではないですか。」

「私が怒っているのは知らなかったことではないですよ、近衛隊長殿。そなたの部下が十分な説明をしなかったことに腹をたてているのです。部下の教育は正しく行なっていたきたいものですな。」

（うへっ！怒りの矛先がかわった。近衛隊長もサイモンも小さくなってる。）

「いえね、大臣。俺は知らなかったのですよ、ケルテンが知らないことをね。てつきりすでに大臣が説明しているものと・・・。」

大臣は苦虫を噛み潰したような顔をしている。

「もうよい！では改めて説明しよう。ケルテン何か質問はあるかね。」

「はい、では質問させて頂きます。勇者は唯一人、しかもロトの血を引くものではないのですか。そう理解しているつもりでしたが？」

「なるほどよく勉強しているな。勇者ロトの伝説とロトの預言書か。」

「ここ一月の間王立図書館で調べた中の公文書にあったのがロトの伝説とロトの預言書だ。俺の知っている事実といくらか異なるが大筋であつてゐる。さらに国内にある無責任な噂（結果的には正しいのだが）を利用して半年前にラダトーム王家が国中に布告をだした。」

勇者ロトの伝説：およそ400年前、アレフガルドを絶望に落とし、大魔王がいた。この災難に対してラダトーム王家は異世界から勇者を召喚しこれを討伐させた。

ロトの預言書：大魔王は死に際して言い残した。我死すともいずれ第二の魔王が現れるであらう。

国民の噂：ロトの勇者の血を引きし新たな勇者が現れ、この国を助けてくれるだろう。

「ここ一月の間王立図書館で調べた中の公文書にあったのがロトの伝説とロトの預言書だ。俺の知っている事実といくらか異なるが大筋であつてゐる。さらに国内にある無責任な噂（結果的には正しいのだが）を利用して半年前にラダトーム王家が国中に布告をだした。」

『この国難に王家は勇者を公募する。我と思わん者はラダトーム城まで出でよ。』

（俺が知っている答えと現実の情報は大臣のそれと一致する。では何が違うのか？）

「そう怪訝な顔をするな。概ね正しいが問題がある。まず第一にもロトの血に連なる者が現れても証明するすべがない。そしてその

者が必ずしも竜王を討伐できるとは限らない。」

「では偽者かもしれない者を勇者として招き入れているということですか？」

「そうだ。だが一人一人にはお前こそロトの勇者として招き入れているのだ。だが何人の勇者が現れようと一向に構わぬ、そのうちの一人が目的を達成すればよい！」

いや、そこでキリッってどや顔されても困るんですが・・・。

「しかしそれでは泥棒に金をやるようなものではないですか？」

「だからお前がいるのだ。」

えっ！俺となんの関係があるんだよ。

「そこでだ。改めてお前に任務を与える。ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士 勇者支援官 兼 査察官だ。」

勇者システムの実情

「ラダトーム王家国務大臣付き特務隊士 勇者支援官 兼 査察官
？」

「そうだ。お前には今日謁見した勇者5人を担当してもらおう。まず支援だが、勇者への助言、救助、レベル管理を主にする。」

「レベル？」

実のところ、この世界では敵を倒してもレベルが上がって強くなったりしない。地道な訓練と経験、素質でしか強くなれない。だからレベルなんてないのだが？

「うむ。各々の勇者の持ち込む素材によってレベルを決める。簡単に言えば倒したモンスターの証明だ。このレベルに応じてどの程度のことが可能か助言するがよい。詳しいレベル管理については素材買取所の者に聞くがよい。」

なるほど。スライムの素材をいくつか持ってきたら、次にスライムベス、ドラキー・・・と強いモンスターと戦わせればいいのか。これが経験値で、買取でゴールドを与える。つじつまはあうな。

「そして一番大変と思われるのが救助だ。もしなんらかの理由で勇者が行動不能もしくは死亡した場合、速やかに現地に行って救助するのだ。尚、死亡していた場合したいが残っておれば王家に伝わる秘術によって蘇生が可能だ。この任務ゆえにお前が特務隊士に抜擢されたと言っても過言ではない。」

どういうことだ。それだけなら近衛の連中でもできるような気がするが・・・？

「お前の疑問はわかる。この任務に大事なものは強さはもちろんのこと、魔法が不可欠だ。その中でもルーラ、ベホイミが最も重要になる。救助に行ったはいが戻ってこれないのでは意味がないからな。現状ではそこまでの魔法が使える者で腕の立つものは少ない。残念ながら近衛でも隊長と副隊長ぐらいしかいないのだ。ケルテン、お前は全ての魔法を会得していたな。」

「ええ使えますよ、全てをね。」

「ならば勇者を救助後、ベホイミによる回復やルーラでの帰還を行なうのだ。」

「しかし勇者の行動不能、死亡、現在位置などは張り付いていなければわからないのでは？」

「その点は問題ない。私の執務室の壁にある世界地図があるな。あれで仔細がわかるようになっておる。それを含めての血の契約だ。」

「なるほど、そのような魔法があるとは知りませんでした。」

「これも王家の秘術よ。知らぬのも無理はない。それはともかくもう一つの任務だが、勇者として力量が足りぬ者、器量が足りぬ者がいたならば、査察官として解任する権限を与える。なお口頭による宣言だけでなく説得も必要だ。ちなみに先月までに旅立った勇者は20名だが現在残っているものは5名しかおらぬ。」

「ちなみに力量や器量の基準はどういったもので？」

「それはお前に一任する。解任される者が納得いかぬ場合もあるうが説得の方法も一任する。」

「え」とつ、それは私の気分でやめさせることができ、さらに気に入らないやつはぶん殴つてでもやめさせろつてことですよね！」

「そうだ。察しいいではないか。ちなみに先月までに旅立った勇者は20名だが現在残っているものは5名しかおらぬ。お前以外に2名の特務隊士が同じく任務についておるが大体実力行使が必要だったらしいぞ。まあお前は近衛隊長と互角に戦えると聞く。せいぜいがんばるがよい。」

ちよ、だれがそんなこと言つた。大臣の隣で近衛隊長とサイモンがニヤニヤしている。お前らか。

「いえ、近衛隊長には一方的に負けています。」

「あの勝負は私の方が一方的に有利なルールの元行なわれたもので謙遜することはない。お前を推挙した私の顔もたててくれ。がっはっはっ！」

近衛隊長が腕を組んで笑っている。隣のサイモンがサムズアップしている。何がグッ！だ。あとで締める。

「それにこれはもう決定事項だ。快く拝命せよ。」

「はあ、わかりました。特務隊士ケルテン 勇者支援官兼査察官 拝命いたします。」

腹が立つので嫌味たらしく片膝を付き、右手を心臓の前に沿える最敬礼で答えてやる。

「よい。任務に励め。」

くそつまるで嫌味が効かない。さすが国王の実弟で王位継承権2位だけはある。これだから高貴な生まれな方は困る。

「最後にもう一つある。もし今夜にでも城下で女を侍らせて酒宴に興じておる不届き者がいたら、即解任、さらに500Gの罰金をさせよ。罪状は国王様への詐欺罪だ。これで国庫への負担はほぼ無くなる。」

うわっなんて悪辣な。5人のうち一人くらいそんなやつはいるだろう。準備金100Gは高くないってわけだ。しかし素直に聞くはずもないから、全ての厄介事を俺に押し付ける腹だ。

「そう嫌な顔をするな。今までおよそ半数がそれで脱落しておる。無条件でお金や名誉がもらえらると思っておる輩は少ないぞ。」

「わかりました。もういいです。せいぜいがんばりますよ。」

おれは重装備を引きずるように退室した。

考察：魔法とステータス

部屋に戻った俺は重い装備を所定の木人形にかけていく。典礼用の装備は細部は結構華奢にできているので装備しないときは部屋の隅の木人形にて片付けておかないといけない。そこににやにやしたサイモンが入ってくる。

「よっおつかれ！さっきは悪かったな。」

「そう思うなら手伝え。片付けるのも手間だ。自分に着せるより面倒くさい。」

「了解。しかしそんなに重いのが嫌なら魔法使い用の正装でよかったんじゃない？」

「ああ、それも考えてはみたんだがある理由があって止めた。」

サイモンが手を止めて聞き返す。

「ある理由とは？」

「さぼるなよ。まあ大した理由じゃないが、まず魔法使いの地位が低い。」

「そうか？おれはすごいと思うけどな。ベギラマとかベホイミとか俺には使えないからな。」

この時代の魔法は過去のロト一行が使用していた魔法に較べてかなり劣る。物語のはじめの作品とかそういう問題だけでは解決でき

ない理由が実際にはあるはずだ。そう思って過去の文献等調べたのはもう5年ほど前からか、今ではそれでとんでもない量の報告書が書ける。ただ報告する義務もないし、唯一の俺のアドバンテージを知られるのも困る。そう俺は全ての魔法が使える。ベギラマではなくベギラゴン、ベホイミでなくベホマ、それ以外の全ての魔法すらアレフガルド中を旅して発掘、解読、会得している。そういった理由を踏まえてこの時代の魔法使いは地位が低いと理解している。

「そういうがベギラマの一撃と君らの剣の一撃、与えるダメージは大差ない。ならばMPを消費しない剣の方が強い。またベホイミで回復できる量もそれと大差ない。かつてのロトの時代の大地を焼き払い、天より雷を落とし、死人すら蘇らせる魔法が使えるわけではないからな。」

俺は嘘をつく。使える魔法を使えないふりをする。この強大な魔法を公表したくない。これは多分ロトの勇者の決定と違わないと思う。戦乱の時代には究極の武器になるかもしれないが平和の時代には強力な暴力となる。またもし竜王側が使えるようになると互いの使用する魔法は被害を拡大するであろうことは想像に難くない。

「ふーん、そんなものか？お前は学者みたいなことを言うんだな。でもよお、そんな強力な魔法が使えたら竜王軍もいちころじゃね？」

気軽に言ってくれる。物を簡単に考えすぎる。こいつは剣の力量は近衛でも上の方、魔法も簡単なホイミ、ギラ程度なら使用できるが双方を別物として考えることしかできない。もっとも片手剣と盾を使用する戦闘スタイルでは魔法は使いづらい。どちらかの手を空けないと魔法を発動できないから戦闘開始にギラ、ベギラマを放ち、戦闘終了後に回復を行なうのが一般的である。

「もしの話はいい。しかし懐かしい称号だ。ここの兵士になるまで戦う学者って言われてた。」

「一日の半分は図書館にいるお前らしいいい称号だ。よしできた。」

サイモンが最後のパーツを木人形に取り付け終わった。

「サンキュ。でさっきの話だが魔法使いのローブ姿は動きづらいから嫌だ。第一格好よくない。」

「プツ。クツクツク！やっぱりお前は面白いな。好きにするがいいさ、俺じゃねえし。」

「あきれたやつだな。よく近衛騎士になれたなお前？」

俺は肩をすくめて言う。近衛にあるまじき軽さだ。

「俺もそう思うよ。先の戦いで兄貴が死ななかつたら間違いなく貴族の次男坊って気軽な身分でいれただろうよ。だれにとってかは知らんが迷惑な話だ。」

「お前が言うな！」

文句を言いながら革の服を着る。自作の特別製で動きやすく軽い。必要な場所だけ金属板で補強してある。箆手も脛当ても同様だ。最後にこれもマイラの鍛冶に作らせた特別製の刀を佩く。刀を作る技術は廃れていたが代々伝わっている秘伝書を解読して作ってもらった。それから更なる改良を重ねて今ではお気に入り的一刀だ。力の強くない俺には使いやすい装備である。

ここからは俺なりのステータスの考察である。
 ちなみにステータスは確認できない。もちろんステータス確認画面なんか出てこない。他人と手合わせしたりして相対的に理解できるぐらいであるが俺、サイモン、近衛隊長の身体能力は次の通りである。

	俺	サイモン	近衛隊長
力	C	B +	A
すばやさ	B	C +	B
賢さ	A	D	C
HP	C +	A -	A
MP	B -	D	C

記号は俺評価で、Aは数値にすると201〜250 B151〜200 C101〜150 D51〜100 E1〜50で、数値の+はふり幅の上、-が下と考えている。例外の数字としてSの250〜255、Fの0（無）としている。Sはお目にかかったことはないがFは純粋な戦士のMPに該当する。

俺に較べて隊長の化け物具合がわかんと思うが、サイモンも十分強い。しかもまだ伸びしろがある辺りに空恐ろしさを感じる。力のCというのは鉄の装備ができるぎりぎりの域である。ただし装備するとすばやさ犠牲になる。ゆえに俺は標準戦闘スタイルは捨てた。それでも普通に戦えば隊長には勝てない。多分サイモン相手でも5割勝てればいい方である。

次に賢さだが俺のAは転生ゆえの知識が上乘せされている。総合すると魔法使いか盗賊推奨のステータスだ。賢さはDあれば下級の魔法が使用できる。Cもあれば中級魔法、つまりこの時代の全ての魔法が使用できる。だからこの時代に賢さB以上は棄てステータス

になる。魔法はワンワードスペルではなく詠唱（発音必須ではない）方式で、理解できない詠唱を丸覚えで使っている。簡単に言うとギラといえば火の玉がでるわけでなく、口頭か頭の中で詠唱してラストワードとしてギラと唱える必要がある。実際はもっと難しくMPの消費、マナとの融合などの基本があるのだがここは割愛する。

総合して俺は隊長に勝てるかというと普通は無理だ。だが俺にしかできない魔法を使用すると可能になる。答えは能力上昇系魔法の使用、具体的にはピオリム（すばやさを元の値の0.25倍上昇する）を2回かける。すばやさB：約170はすばやさS：255に化ける。他にはバイキルトやスカラの使用も有効である。騎士同士の試合は双方構えてからの戦いなので魔法を使用する時間はいくらでもある。かくして俺はそれなりの強さを認められている。

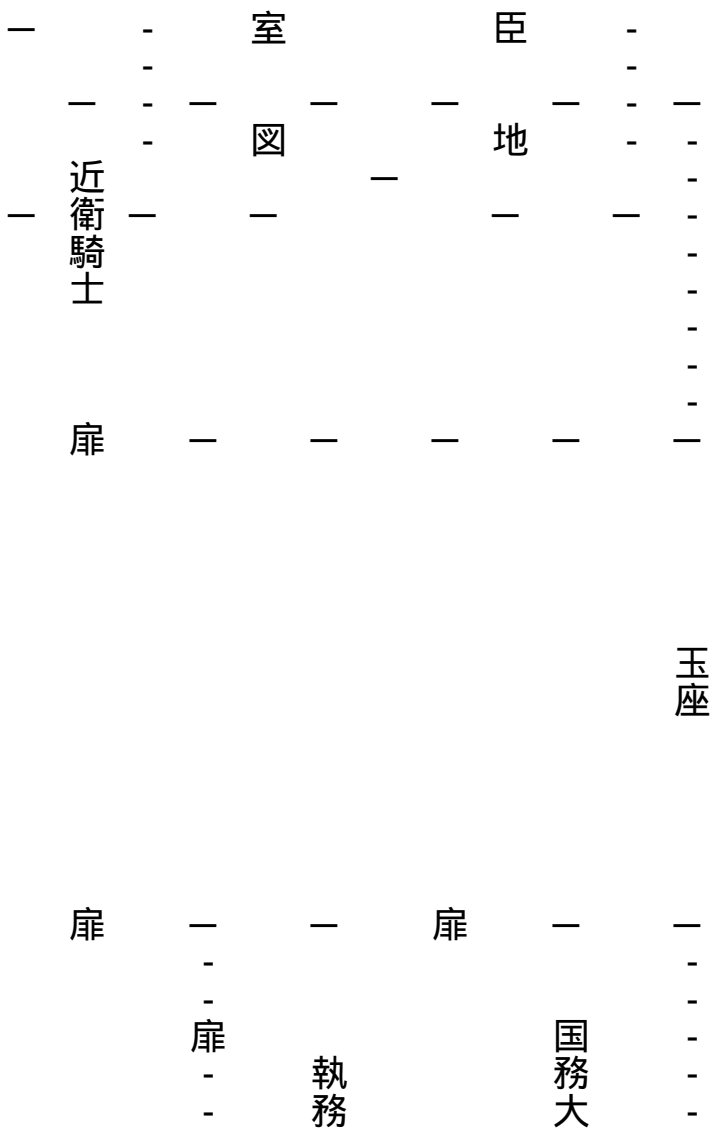
大臣室の地図

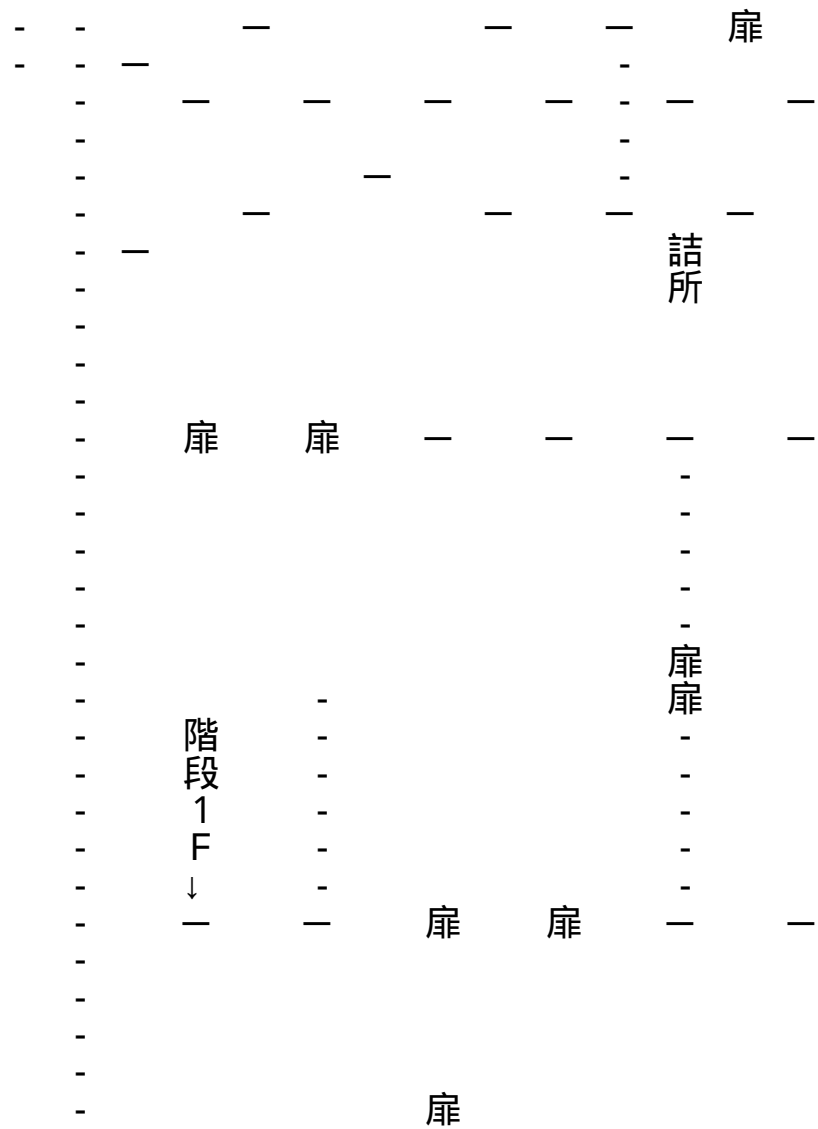
「よし準備完了。愉快的な任務じゃないが行って来る。」

「おう、がんばれよ。応援しているぞ。」

「なんかお前に応援されると、馬鹿にされてる気がする。」

とりあえず今日の勇者5人の詳細と居場所を確認する為に大臣の執務室に向かうことにする。執務室へ行くには城の一階奥の二回への階段を上る。ここには常時二名の兵士が詰めている。もちろん俺は顔パスだ。他には大臣、近衛騎士なども顔パスだ。二階に上ると近衛の詰め所がある。反対側が大臣ら文官の執務室にある。ちなみに中央に謁見室があり、その裏側が王様らのパーソナルスペースになっていて、立ち入りは大臣と近衛隊長以外は許されていない。





二階は礼式がとても面倒くさい。ほとんどの扉の前に近衛騎士が立っていて入室の理由を説明しなくてはいけない。それらの障害を乗り越えて大臣の部屋に入る。部屋の中には何人かの文官がいたが大臣によって退室させられていく。俺を睨んで退室していくのは簡便して頂きたい。

「お邪魔でしたか？ずいぶんと仕事を立て込んでいるようですが？」

「かまわん。今この城で最優先の仕事は竜王と勇者に他ならん。」

「そうですか。ではその勇者ですが・・・。」

俺は地図を眺めながら声をかける。地図にはアレフガルドの簡単な地形といくつかの光点が見える。手前の台には水晶球が紫色の座布団の上に鎮座している。大臣は抽斗から書類を取りだすと、一枚

の書類の上に右手を水晶球に左手をかざす。すると一つの光点が強く光り水晶球に見知らぬ男達の姿が映った。

「見よ。これが血の契約の効果の一つだ。この契約書の人間をこちらの遠見の球に移すことができる。少量のMPを消費するが便利なものだ。」

「これはどれですか？」

「これは勇者12とその一行だ。固有名詞は書類にある通りだ。」

書類にはエイブラムとある。固有名詞で呼べばいいのに。勇者12つてひどくね？

「先も述べたが勇者が何人いようとかわわぬ。同じくそれが誰でも一向に構わぬ。現在いる勇者は12、25、41、42、43そして今月の51、52、53、54、55の十名だ。」

なるほど数字の前が謁見した月、後ろが謁見順か。

「なるほど一月、二月が一名ずつ三月は全滅で四月は豊作ってことですか。」

「ふん。だれがどうでもかわわん。お前は自分の担当勇者のみ気にすればよい。」

うわっ！一気に機嫌が悪くなった。やっぱり王族だ、下々のことなど気にも留めぬか。

「わかりました。では調べさせていただきます。今月の勇者はこの

5枚ですね。」

勇者51 マイラ出身ガルド 大斧の使い手 嗚呼あのごついやつか。現在位置はと……水晶球に手を当て魔力を送り込む。もう城外にいるようだな……とりあえず問題なし。

勇者52 ラダトーム出身ドォーマン うっ記憶にない。居場所
は……城下で同行者2名か。

勇者53 ラダトーム出身クロウ またしても全く記憶にない。
こいつも城下で同行者2名つと。

勇者54 ラダトーム出身ゲオルグ やっぱり記憶にない。完全に意識が無かったようだ。反省せねば……こいつも同行者2名？ちよつと映像を拡大……なるほど、こいつら三名はいっしょか。もしかするとあかんかも？

勇者55 出身地不明アレフ 15歳 若いな。まっ18の俺が偉そうに言うことでもないか。ふむ居場所は城下町。ただし一人……。

最悪今日一日で4人解任しなくてはならないか。うーん、我がことながら大変だな。

「大体わかりました。でも本当にいいんですか？500Gとっても。」

「かまわん。我々王族に対して詐欺を行なったのだ。死刑でもかまわないぐらいだ。」

やべっ 触れてはならないところに触れたようだ。とばっちりが来ないうちに退室することにしよう。

城下町の宿屋

城下町にやってまいりました。当たり前といえば当たり前だが、？の離れた所にある町ではなく同じ城壁内にある？、？のタイプである。この城下町はとても大きく公称の人口で10万人、竜王出現後は集落を失った民が流れ込んでいて20万人とも言われている。10万人といえは多く感じられるかもしれないが、通常兵士一人を維持するには千人の民が必要といわれている。このぐらいの人口がなければ騎士団は維持できない。ちなみに各地の人口はマイラの村5000人、地下の町ガライ8000人、湖上都市リムルダール20000人、砂漠都市ドムドーラ30000人（現在不明）、城塞都市メルキド50000人とされており、またそれ以外にも小集落が多数あった。過去形なのが残念である。リムルダール、ドムドーラ、メルキドはラダトームに多額の税金を払うことで一応の自治を許されている。

さてさっきの勇者達の光点の位置はたしか王家御用達の宿屋の辺りだが・・・なんだ俺が使っていた定宿じゃないか。この宿は俺も結構世話になってたし挨拶ぐらいしておくか。しかしこの宿代は50Gほどだったと覚えているが、もしかして勇者割引で8Gとかになるとか言わないよな。としようもないことを考えながら宿屋に入る。人の良さそうな親父がこちらを確認する。

「久しぶりです。親父さん。」

「おお学者か？城への任官はどうなった。一月も音沙汰無しで心配したぞ。」

「すみません。かなり忙しかったもので。」

心底うれしそうな親父さんがボトルを取り出しながら言う。

「ということは無事任官できたんだな。それはめでたい。今日は奢らせてもらうよ。」

「いやゴメン。まだ任務中なんでそれはまた今度で。」

「ふん。まだ仕事ってどこに配属された？お前の腕なら一般兵ってことはなかるう。」

「うん。知らないかも知れないけど国務大臣付き特務隊士。」

その名を聞いて親父さんの顔が曇る。その表情からは心配そうな感情と嫌悪が感じられる。あまりいいイメージがないようだ。俺の顔色を見て親父さんの顔が元に戻った。

「嗚呼その任務自体は問題ない。まあできれば補助金の金額をもう少し上げてもらえると助かるが……。いや今は忘れてくれ。」

「???。なんか都合の悪いこともあるのか？」

「特務隊士なら勇者の視察だな。五月の勇者が四人ほどチェックインしてる。内三人の態度が以上に悪い。女の従業員に手出すは、部屋にけち付けるはで散々だ。全くあんな安い金でVIP扱いしろって冗談じゃない。」

ああ城批判じゃないからな。念のためな。

「

はあ。補助金も大した額ではないようだ。気の毒でしょうがない。しかしまあやっぱあの三人は駄目なようだ。気が滅入るな。」

「そうですか。で、そいつらはどこですか？」

「さっき出て行った。ただで飲ませてやる酒はないって言ったら椅子蹴飛ばして出て行ったよ。」

「じゃあ。待たせてもらうよ。水もらえる？」

俺はカウンターに腰をかけた。親父がグラスに水をいれてよこす。

「水だけでなく何か食べていってくれよ。結構もらってるんだろ？」

「残念ながら初任給は四日後だ。しばらく我慢だ。それとこれから荒事になりそうなんだ。あまり腹を膨らませるわけにはいかない。」

「そうか？契約金とかあるはずじゃないか？」

「嫌なこと思い出させるね。契約金は推薦者のリムルダールの義父のものだよ。」

「お前の義父って、確かあの町長だよな。」

「そつ、全部税金だよ。去年は竜王のせいで十分な税金が集まらなかったらしい。なにが城で見識を深めて来いだよ。俺は売られたんだよ。」

「しょうがないさ。城の取立ては結構きびしいらしいぜ。お前さんの義父も苦労してるのさ。」

「わかってるよ。別に恨んだりしてないさ。ただ文句の一つくらい

言ってもいいだろ！」

自治権との引き換えの税金が各都市にある。これはその年の取れ高を考慮したりしない。だからお金や物で納められない場合は人で払う場合がある。その場合町で優秀な人材を城に推挙し契約金という形で納めたことにするのである。前例では近衛騎士になった者は数えるほどしかないらしい。それでも一万Gだったらしいから、俺の10万Gは破格だ。リムルダール町長と近衛隊長の推薦を聞いた大臣の顔は見ものだっただけ。まあ栄転ということで喜んでくれる人が大多数だし、王立図書館の閲覧ができるようになった俺はその言葉どおり見識を深めることができている満悦である。

宿屋の入り口の扉が音をたてて誰か入ってくる。若いというより幼さの残る顔をしている。見覚えがある。たしか勇者55、ああ駄目だ駄目だ、番号で呼ぶのは頭の中といえ失礼だ。え〜とアレフだ。「只今戻りました。食事をお願いしたいのですがお金が少ないので一番安いので。」

「わかった。食事はどこへもっていけばよい。ここか？部屋か？」

「ここをお願いします。」

やけに低姿勢だな。まあ威張り腐っているよりは十倍はましだ。銅の剣、革の盾、皮の鎧。鎧が真新しいということは買い替えたのか。俺が勇者アレフを見定めていると俺の隣で直立した。

「先程謁見室でお会いしましたね。勇者アレフです。多分これからお世話になると思います。よろしくおねがいします。」

驚いた。俺は覚えていないのに俺を覚えている。（うそ。俺は呆けていただけ。）

「おっおう。俺は勇者支援官のケルテンという。こちらこそよろしく。」

「王様にお礼を伝えてください。鎧を買い換えることができました。」

なんか雰囲気にも飲まれて敗北感でいっぱいである。謙虚さでも人は押されることがあるんだな。

「ええ、必ず伝えますよ。君も頑張ってください。」

「もう挨拶はいいだろう。さあ食事だ。食べて英気を養いな。」

宿屋の親父さんが食事をテーブルに並べる。結構な量だ。

「あの私が頼んだのは一番安い食事でしたが・・・？」

「いいんだ。若いんだ、たくさん食べて強くなってもらわないとな。勇者さまだろ。」

「そうだそうだ頂いておけ。城から補助金もでているしな。なっ親父！」

補助金の話でまた親父の顔が少し曇る。一瞬の間の後俺と親父は大爆笑する。アレフはあつけにとられている。不愉快なことだらけの今日一日だったがこいつに会えてよかった気がする。

衝突

ドーン！

宿屋のとびらが乱暴に開く。せつかくのいい気分が台無しだ。同じく親父もアレフも嫌な顔をしている。

「おらっ勇者様のお帰りだあゝ。」

女の肩を抱いた酔っ払い三人が入ってくる。反対の手には酒瓶。テーブル席のあたりを占拠すると酒盛りを始める。先程確認した装備と全く変わってない。同行している女は安っぽい香水の匂いにあるからさまな露出度の高い服、いかにもな娼婦だ。さてどうしたものかな？どの程度から詐欺罪って申告できたかな？

「ねえ、いつもお金がないって言ってたのに今日はどうしちゃったのおゝ？」

「そうよ！いつも冷やかしばっかだったのにい。」

「そりゃ言えねえな。お金はあるところからもらえばいいんだよ。げっひゃっひゃっひゃゝ！」

「何よそれ。教えなさいよ。教えてくれなきゃ帰るゝ。」

「そうよ。あんた達だけずるゝいゝ。」

完全にできあがってるな。もう少し泳がせたら全部しゃべってくれないかな。娼婦頑張れ！今お前達は優秀な検察官だ。

「誰にも言っつなよ。秘密だぞ。秘密だからな。絶対言っつなよ！」

「うん絶対言わない。私達の秘密ね。」

もう一息だな。まるでトリオのお笑い芸人のようだ。

「じゃあ言うぞ。実はな、城に行つてなにを隠そう私がロトの末裔です。つてやつてやつた。」

「えゝ！三人とも。それってなんか変じゃない。」

「細けーことはいいんだよ。それでとりあえず100Gもらえたんだからよ。あとはスライムなりいじめてもつと金もらつてくるからよ！」

おいおい。スライムは一匹で1Gにしかならんぞ。いや突つ込む所が違うな。はい言質とりました。さてお仕事お仕事つてあれ？アレフ君何するの？

「あなた方恥ずかしくないんですか！勇者ロトの末裔を偽証し、あまつさえそれで得たお金で遊興に走るとは恥を知りなさい。」

「なんだあお前。なにをガキみたいなことを言つてるんだ。つて本当にガキじゃねえか！ガキは帰つてお寝んねの時間ですよ。」

「そうよ！もう少ししたらお姉さんがお相手してあげる。」ちゅっ！

「止めてください。私はこの人達と話をしているのです。」

「うるせえ！こっちはお前なんかとする話はねえな。」

あかん。そろそろ止めないと収拾が付かなくなる。俺は立ちあが

ってアレフの肩をポンと叩く。

「ああ君は正しいがそれだけでは世界は回らない。あとは任せてくれ。」

そして酔っ払い三人に向かって話しかける。

「では改めて、私は勇者査察官ケルテンと申します。勇者ドゥーマン、クロウ、ゲオルグ3名を解任します。尚血の契約において重大な偽証があるゆえ全員に500Gの罰金を申し渡します。意味はわかりますか？」

「なっ！てめえ何言ってるやがる。」

「理解できませんでしたか？私は勇者の査察官をしています。つまり私の権限で勇者を解任することができます。ここまではよろしいですね。」

皆静まり返っている。その酔っ払いも娼婦達も宿屋の親父、勇者アレフも。

「勇者の解任には次のいずれかの理由が必要です。まず勇者の力量に足りない者、こちらとしても無理に命を失わせるのが目的ではありませんし、支援には限度がありますから弱い者は辞めていただくことになります。次に勇者として器量の足りない者、これは素行の悪い者はモンスターとなんら変わりないと言うことです。勇者の名前下、軋轢がうまれては意味がありません。そして最後に目的遂行の意思のない者、これにいたっては論外ですね。あなた方はこの三点すべてに当てはまります。」

「異議有り！」

一番弱そうなドゥーマンが何か言い出した。異議有りときたか。ここに至って何を言い出すか面白そうだ。

「俺達はいま酔っ払っているがこれは明日からの活躍に向けて英気を養っているだけで目的遂行の意思がないわけではない。」

「なるほど。続けてください。」

「それに素行が悪いとおっしゃられるがこれは酒による一時の過ち。どうかご甘受願いたい。」

こいつ結構弁がたつな。ローブ姿だから魔法使いタイプか？

「そして力量が足りないとおっしゃられたが試しせずに判断できないのではないのですか？」

なるほど詭弁とは言え、一応反論として成立している。

「わかりました。では力量を試させていただきましようか。実践形式で結構です。」

「ちょっと待て、今俺達は酔っていてまともに戦えな「かまいません。酔いを醒まさせる方法がないわけではないですから。親父さん、例の特別ジュースを三杯頼みます。」

こいつらの戯言にいつまでも付きあってられるか！こんな嫌な顔を見るのは今日で最後にしたい。

さて目の前に緑色のドロドロした液体が運ばれてくる。これは昔

考案した対酔っ払い用の特別ジュースだ。製法は簡単、毒消し草をすり潰し適当な果汁とシェイクした物だ。アルコールは一種の毒なのである。キアリーを使えばもっと簡単なのだがこの時代には本来無いのでここでは使用しない。

「さあ、グググッと飲み干しちゃってください。私のおごりです。10分もすれば酒が抜けます。ああまずいのは我慢して下さいね。」

しぶしぶ飲み干す三人。とても不味そうだ。というか実際不味い。親父もカウンター内で苦そうな顔をしている。俺はカウンターに50G置く。

「お釣りはありません。必要経費ですから。」

「では酔いが醒めるまで試験の方法について話しましょうか。何か条件があつたら聞きますのでどうぞ。」

「条件って何を？」

「ふう、何も考えていませんか。どんな戦いでも最低限の条件はあります。ルールと言ってもよろしいですね。例えば騎士同士の試合は双方同じ装備同じ人数で魔法無しで行います。一方冒険者ではほとんど決め事はありませんが宿屋の中ではやりません。大事な仕事の幹旋場所ですから暗黙のルールです。」

「じゃあ、俺達はいつも三人で行動している。だからこちらは三人でやる。」

「OK！それでいい。他には？」

「あんたのその武器はずいぶん立派だ。不公平だ。」

「おい！何勝手なことを言っている。あんたらは三人でさらに武器ま「アレフ君、私の為に怒ってくれなくてもよろしいですよ。その条件もOKです。じゃあこれはアレフ君に預けておきましょう。でこれだけでいいですか？」

「じゃあ場所はすぐ外の道路上でいいな。まさか城の兵隊さんは街中で火や雷の魔法をぶっ放したりしないよな。火事にでもなったら大変だ。」

「なるほどその通りです。忠告ありがとうございます。ではギラ、ベギラマは私は使用しません。」

よほど自分たちのとりつけたルールがうれしいのか奴等の顔色がよくなってきた。赤くなったり青くなったり戻ってみたり顔色だけで忙しいやつらだ。

「おい、本当に大丈夫か。必要なら城に行つて騎士を呼んでくるが。」

「心配ないよ、親父さん。まあ見てなつて。」

30分後、3対1 さらに不公平なルールの試合が始まる。

決闘

ガヤガヤ ガヤガヤ ガヤガヤ ガヤガヤ……

いつの間にか宿屋のまわりは人であふれている。いったい何がおきた？窓からこっそり外を覗く。

「偽勇者三人相手に城の兵隊さんが喧嘩売ったってよ！」

「いや勇者は本物で兵隊が因縁つけたって俺は聞いている。」

「えゝ賭け金は1Gから、今の所オッズは勇者三人が1・5に兵隊が3、おいだれか兵隊にかけるやついないのか！賭けにならないぞよし兵隊のオッズは5だ。だれかいらないか？」

いつのまにか祭りの会場になっている。屋台でもでてれば完璧だな。

「大事になってすまない。うちのおんなどもが外に触れ回ったらしい。最近景気のいい話がなかったから皆話題に餓えていたらしい。なんなら今からでも止めさせるが……」

「あゝ……えゝ……まあしょうがないかあ。いや今更止めれる状況じゃなさそうだ。場所だけ確保してくれるかな、半径10mくらいでいいから。」

「うちの前では狭いな。若い者に中央の広場を確保させる。しかしお前さんにはつくづく悪いことした。すまない。」

「別に親父さんが悪いわけじゃない。もう謝らないでいいよ。こっちが悪い気がしてくる。」

- - - - -
時と場所を移すこと ラダトーム城下中央広場 二時間後、完璧な祭りの会場が出来上がっている。急遽用意された屋台、ロープと簡易な木で作られた10m四方の闘技場。山のような人、人、人。もう10時は回っていて本来なら真っ暗なはず・・・誰だよわざわざレミィラで照明作ったのは。

「えゝそれではこれより自称勇者三名とラダトーム城兵士の決闘を行います。ルールは双方の申し出より決定しています。勇者側は三人パーティー武器魔法など制限無し、兵士は武器無しギラ、ベギラマ使用禁止となっています。」

宿屋の親父が立会い人兼司会者となってアナウンスする。

「おい！なんだそれ。勝負にならねえよ！！賭けるの止めるぞ！」
「えゝ条件が変わっても掛け金の返金はしません。このまま続行します。なおオッズは1・2対10に変更します。」

さてとそろそろ登場するのでしょうか。モシヤスとか使っちゃ駄目かな。あまり個人として目立ちたくないし、いや駄目だなもう手遅れだ、あきらめるか。

俺がとことこと広場にでていく。そのあと自称勇者三人が出て行く。騒ぎが余計にはげしくなった。

そうだろうね、俺一見強そうに見えないから。身の丈170cm、筋肉は付いているが細身、顔も普通、しかも武器なし革の服のみ、これが俺の今のスペック。かたや対する三人はゲオルグ身長190弱、結構こつい体をしている。銅の剣、革の盾、布の服で強そうに見えるな。クロウ身長は俺と変わらないが俺より肉付きはいいよう

だ。こん棒に布の服。多分三人の中で一番劣る。最後にドゥーマン身長170弱俺より細身ローブ姿で木の杖を持っている。どこから見ても魔法使いだ。大体の戦法は想像できるな。さてどうでるかな？とりあえず準備しよう。まずピオリムを二回かける。バイキルトはいらないか・・・スカラは念の為にかけておくか。魔法対策にマホカンタでも使いたいが却下だ。あれは派手に効果がありすぎる。ロストマジックは使用がばれたくない。こんなもんでいいだろう。

「最後にこの決闘において故意に命を奪わぬこと、後に遺恨を残さぬこと、双方精霊ルビスの名の下遵守されること。ここに在る全ての者が見届ける。それでは始め！」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

ゲオルグ（剣）

俺

ドゥー

マン（魔）

クロウ（こん棒）

- - - - -
- - - - -
- - - - -

予想通りの布陣だ。ゲオルグとクロウが互いに目配せしている。そしてちらちらとドゥーマンの方を見ている。積極的に前に出てくるやつはいない。近接二人で俺を引き付け後ろからギラで一撃、基本だな。

「おいせつかく三人もいるんだ。そつちから仕掛けてきな。」

わざと挑発するように手を振る。動け！形が崩れないと攻め手がない。

安っぽい挑発だが効果があったようだ。クロウのこめかみがピクピクしている。

「この野郎！」

クロウが一步踏み込み、こん棒を振り上げた。

そこっ！すばやさ255は伊達じゃない。俺は一足跳びにクロウの懷に飛び込み、こん棒を振り下ろす右手と襟をつかんだ。

「ギラッ！」

あせったドゥーマンがギラを放つ。俺はそのままクロウをドゥーマン側に背負い投げる。あえて叩きつけずに放り投げる。火の球が空中で逆さまになったクロウの背中を焼く。

「ぎゃあああゝ！！！！ぐふっ！」

地面に落ちてのた打ち回るクロウに近づき頭にサッカーボールキック。一つ！次二人目、ドゥーマン側に走る。先程と同じように踏み込む。

「ひいゝ」

ドゥーマンが頭を抱え込んでしゃがみこんだ。おいおい俺がいじめてるみたいじゃないか。しょうがない。

「寝ろ！ラリホー。」

ここまで多分二息。見ている者には一瞬で戦局が一変しただろう。静まり返っていた場が騒がしくなる。

ウワアアアアアー！！！！

俺はゆつくりとゲオルグに向かって振り返る。ゆらあつとでも不気味な効果音が聞こえていたらベストだ。

「さて残るはお前だけだ。続けるか？止めるなら今のうちだぞ。」

「なめるな！」

ゲオルグが激高し銅の剣を振り回す。袈裟斬り、右薙ぎ払い、左横払い、突き。機からみると猛攻に見えるかもしれない。固唾を呑んで観衆が見守る

ピオリム。この呪文は最大ですばやさを1.5にする。しかし体が速くなっても意識は付いてこないし、慣性や重力は普段と変わらず発揮する。この状態になれるため結構無理な修行を詰んだ俺にとつてこんな大振り見切るのには造作もない。しかし革の盾が邪魔になつて懷に飛び込みにくい。いったん距離を置こうとバックステップ。ズルッ！踏ん張りが利かず片膝をつく。やばい！

「馬鹿め！もらつたああ！！！」

上段からの真っ向から竹割り。

「キヤ――――！」

観客の悲鳴があがった。そして静まり返る観衆。最悪の終わりが想像される。そこには銅の剣を両手のひらで挟み受け止めている俺がいた。真剣白刃取り。よく取れたものだ。俺は我にかえり腕をひねり武器を奪い取る。呆然としているゲオルグの腹を蹴飛ばし倒す。

「終わりだな。」

銅の剣を突きつけ宣言する。

「そこまで！」

観衆の歓声は最高潮に達した。多分ここにいるとやばい状況になると思われるので退散するしよう。手にしていた銅の剣を放り出す。あゝうるさい。耳をおさえながら歩く。

「アレフ君。私の刀を返してください。」

アレフの耳のそばで大声で叫ぶ。

「えっああ！はい、これどうぞ。」

啞然としていたアレフが我に返り刀を差し出した。

「ありがとう。また会いましょう！」

俺は群集にまぎれるように姿を消した。

決闘の反響

うーん、よく寝た。もう6時か、あれだけ身も心も疲れてたわりには起床時間は変わらないとは習慣とは恐ろしいな。うわっ手の平が痛い。昨日銅の剣を受け止めた所が青くなっている。やつぱり無茶だったようだ。銅の剣で助かったようだ、鉄の剣や鋼の剣だったら・・・もうあんなまね止めよう。手足が何本あっても足りん。とりあえず治療しておこう。

「ホイミ」

うんホイミは便利だ。多少の切り傷、打ち身、筋肉痛にも効く万能魔法だ。一人ぶつぶつ言っているとノックの音が聞こえる。

「ケルテン殿起きていらっしやいますか。来客ですが。」

誰だよ、朝っぱらから。扉を開けると騎士見習いの一人が立っている。

「はいはい。起きてますよ。で来客ってどちら様ですか？私しか駄目なんですか？」

「はい名指しです。しかも勇者殿です。」

昨日の連中がクレーマーにでもなったか？そうだったら嫌だな。他には心当たりないし・・・。

「ではすぐ行きますので、応接室に通しておいて下さい。」

「わかりました。そう手配します。」

ラダトーム城兵士宿舎 談話室

談話室は非常に重苦しい空気に包まれている。ここにいるのは俺と勇者アレフの二人だけだ。この空気を作った張本人は真剣な目で俺を見つめている。先程開口一番

「私を弟子にして下さい。」

ときたもんだ。それから5分ほどずっと沈黙が続いている。俺はさつきから考えているのだが考えがまとまらない。個人的に一人の勇者についていいものか？俺に何か教えることができるのか。俺自体何人かに師事したが基本独学で覚えたことの方が多い。そもそも俺に何を支持しにきたのか？昨日初めて会ったから昨日の決闘に何か感じる物があつたのか？さっぱりわからん。

「ゴメン。よくわからないのだが何を師事するつもり？」

「全部です。必要なら武器も変えます。魔法もできる限り覚えます。」

「ああそれ駄目ね。いくら私の真似しても強くはなれない。今持つてる技術を昇華させるようなことをしないといけないよ。私と君は同じじゃないから。」

「それです。」

「えっ何が？」

「そういう考え方です。私にはそういう何かが足りません。孤児だった私は生きる為に武器を振っていました。更に必要なので魔法もかじりました。一応ホイミ、ギラは使えます。でも何か足りないのです。昨日の決闘をみてこの人だと思いました。」

なるほどね。必死で生きてきたんだ。よく曲がらずにいたものだ。

「OK。わかった。でもさっきも言ったように一から十は教えない。君が持つてる三なり五なりを十に近づける。そういう方法を教える。それでもいいか？」

「はい！それでかまいません。師匠。」

「ああ、それも駄目。俺にはケルテンという名がちゃんとある。肩書きとかで呼ばれると俺が俺で無くなった気がする。だったら俺も君のことを勇者55で呼ぶよ。」

「勇者55？」

「知るわけないか。君は五月の五番目に申請してきた勇者と城では認識している。失礼な話だろう。」

「では昨日の三人も？」

「そう、かれらは勇者52、53、54だった。んっ？あれっ俺正式に解任してない。また探さないといけないか。まあいい、それは置いて俺のことはケルテンと呼んでくれ。」

「わかりました。では私のこともアレフと呼んでください。この大

地の名を頂いた大事な名前です。ケルテン師匠。」

「わかった、アレフ。今からお前は俺の弟子だ。ではまず技量がみ
たいから訓練場に行ってくれるか。案内はさせる。」

そして騎士見習いを呼んで案内をさせる。俺は自室に戻り自分の
刀を佩き、アレフに使わせる鉄の剣と鉄の盾を持つ。これは支給品
だが使っていない物だ。実は鉄の剣は市販では売っていない。正規
兵の武器である為一般には販売が禁止されている。

- - - - -
- - - - -

兵舎訓練所 ラダートム城の兵士は特に訓練義務があるわけではな
いが、一般的にここを使用して自己鍛錬を行なう。俺は毎朝一時間
半ほど刀を振っている。

さてアレフと騎士見習いの二人がいる。とりあえず重いので鉄の
剣と盾は置いておく。

「あゝ君、名前は？」

「はっ！ ジョルジュといいます。」

「そんなに緊張しなくていいよ。じゃあジョルジョ、アレフと木剣
と木盾で模擬戦をやってもらう。双方手加減はいらない。もちろん
攻撃は当てること。とりあえず三本勝負でいいかな？」

今日の前で模擬戦をやっている。ジョルジョ君は流石騎士見習い
らしく正当な剣術を使う。基本に忠実でフェイントの使い方も教科
書通りうまいもんだ。だがまだ体ができていないからまだ剣筋が甘

い。嗚呼そういえば不思議なのがサイモンだ。昔初めての模擬戦やった時、片手剣に盾を持つ正統スタイルでヤクザキックかましてきた。同じ剣術とは思えんな。いかん考えがよそに行った。さてアレフは型がない。ちからもすばやさも相手より上だから通用しているだけだがまだまだ可能性はありそうだ。三本勝負の結果は、アレフ二本、ジオルジュー一本だ。

「さて先に品評をしておこうか。

まずジオルジュ君。君はそのままでもいい。ただフェイントに固執しすぎじゃないかな。たまには気合の一撃を入れるといい。それでフェイントが生きる。

次アレフ、君は身体能力に頼りすぎ。多分格下には強いが格上には通用しない。とりあえず基本の剣筋を確立しようか。よし大体やるべきことはわかった。ジオルジュ君ありがとう。もう戻っていいよ。またあいてをしてやってくれ。」

先程放り出しておいた鉄の剣と盾をとってアレフに渡す。

「まず先に行っておくが、理解できないことがあつたら必ず質問すること。理解しないまま訓練しても身につかないから。また納得できないならいつ師事することを止めてもかまわない。ただしその場合は必ず口で言ってくれ。いいな。」

「わかりました。でも師事を止めるなんてありません。絶対に。」

「よし、練習だけだがその剣と盾を使ってくれ。やっぱり本物を使わないといけない。とりあえずそれを持って構えてくれ。」

アレフは右手の剣を少し掲げ、左手の盾を前に出す。左の軸足を少し前に出し、かるく腰を落とした構えをとる。悪くない構えだ。

「それがいつもの構えか？」

「はい。何かおかしいですか？」

「いや別におかしなことはないよ。その状態をホームポジションと言うことにする。」

「ホームポジション？」

「ああ気にしないでいい。ではその木偶を思いっきり斬りつけてくれ。」

木偶とは直径10cmぐらいの木を十字に組んでそれに麦わらを巻きつけた物。必要ならここに甲冑を着けて使う。アレフは剣を思いっきり叩きつける。剣は振り下ろしたままだ。

「はいそれ駄目。攻撃の後は必ずホームポジションに戻す。」

「あつ！でもなんで？」

「まだ敵は倒れていないかもしれない。だから次に備えた姿勢に戻す。じゃあ次は木偶の無い所で素振りをしてくれ。ただしさつきと同じ威力のままで。」

アレフは思いっきり剣を振り下ろし、ホームポジションに戻す。そしてこちらをむいて笑う。

「そうだ、それでいい。では次はその一連の動作を100回繰り返す。」

これが結構大変だ。見てみると半分位から振り下ろしが甘く、ホームポジションへの戻りも不正確だ。
一応終わった後、肩で息をしている。

「結構きついだろう。まずこれができるまで他のことはしなくていい。最終的にこれを1分の休憩を挟んで10セットできるようにしてもらおう。腕が動かなくなったらホイミを使うといい。」

「でもこんなので強くなれますか？」

「これはそれ以前の問題。さっきのジョルジョもこれに近いことをやってるはず。ちなみに」

俺は刀を中段に構え、一瞬の振り上げの後振り下ろす。そして中段に構えなおす。これを100回繰り返す。これだけやって息もきれないしおよそ3分で終わる。

「俺のはこんな感じだ。10年毎日やっている。まあ一週間でこれぐらいはできてほしいかな。午前中はここを使っている。午後からはモンスターを狩ってくることに。弱いモンスターでもいいから基本を抑えながら戦うこと。ついでお金も稼ぐこと。では俺も日課の続きをするからアレフも続けるように。」

俺はいつもどおり刀を振る。振っている間は他の事は何も考えない。目の前にいるイメージを斬る。ここ一ヶ月の仮想的は近衛隊長である。10セットが終わったら次の型に移る。自然体から居合い逆袈裟切り、振りかぶって両手持ちで幹竹割り、納刀の一連の流れを100本、10セット行なう。ふと我にかえると隣でアレフがあっけにとられている。

「おいおい、手が止まってるぞ。」

「すみません。なんかすごくて。」

「毎朝ここにいるから、そのときだけ教えてやる。じゃあ俺は終わったからあとは自分で続けること。剣と盾は終わったらその辺の見習いに返しておいて。」

言うだけ言々と俺は練習場を立ち去った。今日はやることがいっぱいあるからあまり付き合ってやれない。昨日の連中を解任しなくてはならないし、賠償金の支払い手続きもいる。さらに勇者51はどこへ行ったのか気になる。今日も忙しくなりそうだ。

祭りの後と後の祭り

いつも通り食堂で朝食をとる。いきなりの運命の変転に気が滅入る。無意識にフォークで肉や野菜をつついていいる。誰は来たようだな。

「ケルテン師匠、ここにおいででしたか？」

サイモンが冷やかすように言う。

「てめえ！なんでそれを。」

「くつくつく！ジョルジョから聞いた。私もよい助言を頂きましたって喜んで皆に触れ回ってたぜ。」

頭を抱える。なんだよ、他に娯楽はないのかよ。俺で遊ばないでくれ。

「それともう一つ。」

そっついながらサイモンが袋をテーブルにドンツと置いた。何が入っているんだ？結構重そうだ。

「いやゝ昨晚は儲かった、儲かった！なんせ10倍の鉄板レース。」

サイモンが袋をひっくりかえして中のゴールドをテーブルにぶちまける。食堂にいた連中が寄ってくる。

「あ・あ・あゝお前・・・これ！」

俺は声にならない声を出して、ゴールドの山を指差す。1000Gどころじゃない。その倍はあるか？

「昨日の夜な酒でも飲もうと城下に出たら祭りやってな。でな！主催の決闘の賭けに有り金全部お前に賭けた。ああいうのって普通掛け金に限度額あるだろ！でもお前の無茶な条件にお前に賭けるやつがほとんどいなくて、胴元がお前に限り限度無しでのってきた。いやゝお前格好よかったよ。」

もういい。もういいよ。お前、俺をおもちゃにして喜んでるな。

「よゝし、今日は全部俺のおごりだ。皆ここでも何食ってもいいぜ！」

そして朝から酒宴が始まった。

「ケルテンに！」

「サイモンに！」

『かんぱゝい』『乾杯』『乾杯』……………

俺はこの馬鹿騒ぎに巻き込まれないよう逃げ出した。逃げればつかいるな、俺。

- - - - -

あいつら呪ってやる。大臣と隊長にたっぷり叱られるがいい。俺はぶつぶつ言いながら街中を歩く。見事なまでに人が俺を避けていく。きつと怖い顔しているのだろつ。それはまあどうでもいいとし

て、目的地は昨日の宿屋である。あの連中がいればいいし、いなくても手がかりくらいはあるだろう。はたして・・・？

結論。連中は宿屋の一室に籠っていた。あの後ここに逃げ込んだ方がいいが、外の喧騒に一步も出ることができなくなったらしい。三人とも目の下に隈ができています。眠れなかったのだろう。

「なんだよ。負け犬を笑いに來たのか。強い強い兵隊さんよ！」

「強いつてのは気分がいいんだろうな。やる前から俺達のことを馬鹿にしていたのだろう？」

「500Gなんて払えねえぜ。ないもんなないからな。」

なるほど。いじめられて拗ねてる状態だ。強くも出られず、かといつて逃げるに逃げれないから開き直ったか？

「まあ馬鹿にしていなかったと言ったら嘘になるな。だが事終わつた後笑いに來る趣味は無い。だがやることはやらないと俺が大臣に怒られる。」

ここで言葉を止める。かなり心配そうな顔をしている。

「まず昨日の通り勇者は解任させてもらう。それと賠償金500Gだが今すぐ払うのは無理なのは分かっているから、モンスター素材の優先買取の権利だけは取り消さずこれを持って支払ってもらう。」

「嫌だといつたら？」

「ああその場合はもつと簡単だ。王様に対する詐欺ということで死刑だ。逃げてでも無駄だぞ。あの血の契約でどこに逃げてでも居場所が分かる。だから逃げるのあきらめろ。俺も追うのは面倒くさい。」

「わかった。死刑になるのは嫌だ。だろっ？」

残る二人に同意を求める。当然縦に首が振られる。

「よし、では詳しいことをつめようか。買取金額のうち半分は即賠償金としてもらう。残る半分は自由に使っていい。その金で余分に賠償金を払おうが、生活費や装備などに使用するのも自由だ。最高で三人で3000G相当の素材を買い取ることができるな。」

「えらい段取りがいいな？もしかして最初から決定事項か？」

「そうかなり悪辣な罠だよ。大臣に聞いたときもそう思った。まあ高い授業料と思うんだな。」

三人がため息をついてうなだれる。

「あと一ヶ月に一度は報告に来てくれ。もし遠征で一週間以上連絡が取れなくなる予定がある場合も事前に相談してくれ。具体的に言うとならガライは3日、マイラは5日、リムルダールなら2週間にかかる。例えばリムルダール近郊にいるゴールドマンなら1体で1000Gになるが・・・」

ここで三人の顔を見る。

「なあ、人の顔を値踏みするように見ないでくれ。」

「いや悪気があるわけじゃない。どの程度までならいけるか考えていた。」

「で、俺達にいけそうなのはどこまでだ？」

「そうだな。二、三日はラダトーム近郊で遠征費用を稼ぐ。その後ガライへの遠征で野営に慣れるべきだな。あとはガライから帰ってきてから相談だな。」

このとき三人は呆れたような顔で俺を見つめていた。

「何？顔に何かついてるのか？」

「あんた自分が何言ってるか分かってるのか？その見識と自信はどこからでてる？むしろあんたが勇者だって名乗りでもいいぐらいいだ！いや今からでもそうするべきだ。」

あれっそう言われりやそうだ。自分が異分子だと判断して大きく世界に関わらないようにしてきたし、自分は勇者じゃないと思ってたから……。

「まあ俺のことは置いて、君らの話を続けよう。さっきも言ったようにガライに行って帰ってこれるようになってくれ。いいな。」

「はあ。最初からあんたに会えてればよかったのに。そうすればこんなことにはならなかったのに。」

「なあ俺らはどうしていればよかったんだ？教えてくれよ。」

しばらく考える。こいつらはもともと銅の剣、こん棒、布の服3着、革の盾を持っていた。で前衛2、後衛1……ならば俺ならこうする。

「そうだな。まずもらった300Gで革の鎧を2着買う。ゲオルと

クロウの分だ。あとクロウに革の盾を一つ買う。これで残金は70Gだ。ここまでやって残りで遊興にいそしめばよかった。最低でも翌日からの意思が表明できた。あと革の鎧だったら俺には投げられない。襟がつかめないからな。じゃあ俺は次の予定があるからまたな。」

部屋をでて俺は外に向かう。物分りのいい連中でよかった。もつとこねてくるかと思った。次は勇者51ことガルドだ。大臣の執務室で調べるかな。

美女と魔法談義

大臣の執務室だ。簡単に昨日の結末と後始末について大臣に説明する。さして興味もなさそうに大臣はいった。

「それについてはそれでよい。であとの二人は有望か？」

「分かりません。ただ内一名が私に師事してまいりましたので許可してしまいましたが、よろしかったですか？」

「かまわぬ些細なことだ。だが役に立たないと判断したなら速やかに放逐せよ。」

相変わらず大臣はある程度の身分以下の人間にたいして厳しい。選民意識の強い人だ。個人的には好きではないが国務大臣ともなると、いちいち下々のことなど気にもかけぬのも当たり前か。

「では残る勇者51について調べます。」

抽斗から勇者51ことガルドの書類をだす。書類に右手、水晶球に左手を置き魔力を送り込む。地図上の光点の一つがより強く光り、水晶球に歩く姿が映し出される。場所は・・・こことマイラの間ぐらいか。

徒歩にしては脚が速いな。問題は今の所無しか。

「では失礼します。」

退室する俺に大臣は一瞥すらしない。

- - - - -

厄介になると思われた今日の予定が半日ほどで終わった。残った時間は図書館で消費するとする。

ラダートーム城一階にある王立図書館。ここには美人の司書官がいる。彼女は宮廷魔術師を兼任していて、馬鹿は嫌いと言っているにも関わらず近衛騎士やら貴族のぼんぼんの来館に頭を悩ましている。

「マギー！今日は来れたよ。」

俺は軽口を叩いて入館する。ここ一ヶ月毎日通っていたが昨日は来ることができなかった。しばらくここに来る機会はぐつと減るだろう。では今日のうちに俺なりの研究結果を教えてやってもいいかな？

「ケルテーン！もう昨日はどうしたのよ。ずっと待ってたのよ。」

「おいおい！聞いていないのかよ。勇者査察官に任命されたんだ。大変だったんだぜ。」

マギーが抱きついてくる。この人は自分が美人な自覚がない。おまけに胸が大きいのも気にしていない。俺はときどきと通り越してばくばくしている鼓動を抑えるのに必死である。照れくさいのを隠すように文句を言う。俺の鉄の剣が大きくなる前に放してくれてよかった。

「それね、馬鹿どもが言ってたのは。」

「俺がここに来なくなるなんて無いよ。まだ読んでいない本がいっぱいあるしね。」

俺がこの城に来た最大の理由がここにある。この図書館には門外不出の文献がいっぱいある。ロトの洞窟、雨の祠、虹の祠（雨と虹の祠は単独で存在しておらず小集落に祠があった。）などのロトの足跡を追い始めたのは5年ほど前、存在していたはずの技術を探し求めた。その集大成がここにあった。

「わたしは？」

マギーは怒ったように言う。

「いや君に会えるのもうれしい。また魔法談義ができるし。」

そう俺が気に入られているのはその一点に尽きる。彼女は「言目には『かつて魔法使いは天を地を人を思うように操れたはず。』と言って今の魔法に満足していない。」

「じゃあその魔法談義で許してあげる。」

「OK！じゃあ準備するからそこで待ってて。できれば飲み物を用意してほしいな。」

図書館を歩き回って幾つかの本を持ってテーブルに付く。マギーは不器用にお茶を入れている。大体いつもの通りだ。

「じゃあ始めようか。今日は俺の推察したことについてだ。まず第一にギラはギラじゃない。さらにベギラマはベギラマでは

ない。意味分かる？」

「わかんない。ギラはギラでしょ？」

「そうだろうね。俺も同じこと聞いたらそう答える。じゃあこれ見て。」

俺は本を取って挿絵のあるページを開く。挿絵にはギラを使う魔法使いと説明書きがある。また別の本を取って開く。こちらには魔法の説明がある。

「これが何？ギラの説明でしょ？」

「この絵をよく見て、ギラで大地を焼き払ってるだろ。」

「そうとも見えるね。」

「じゃあ、君のギラで同じ事できる？」

「無理ね。火球が出るだけ、こんな風に焼き払うことはできない。」

「次、ここにある記述”ベギラマはギラの上位魔法である。”これについて、さてベギラマはギラの上位魔法か？」

この質問にマギーは首をかしげる。斜め右上を見上げながら何か考えている顔はとても美しい。

「そうね。そういえばおかしいわね。ギラは火球の魔法、ベギラマは稲妻の魔法。全然違う。」

俺はさもこの文献で解かったかのように説明する。ただ事実を述べているにすぎないのだが、この時代のギラは実はメラである。同じようにベギラマはなんとライデインである。この事実に気づいたとき俺は失われた魔法を再現できる可能性にも気づいた。今それを始めて他人に洩らしている。

「次に魔法の詠唱内容について、これは今意味の解からない言葉を丸暗記して詠唱している。そうだよな？」

「そうよ。はるか昔口トの勇者一行から教えられた魔法は口伝のみね。」

「俺の考えでは当時アレフガルドには魔法技術が低かったと思っている。そこにそれらを自由に操る大魔王たちがこの地を征服した。そして同じく魔法を駆使できる勇者が光臨して大魔王を倒した。このとき少しの魔法が伝授された。」

「だめよ！その名前を口にしてはいけない。」

「なにが？大魔王のこと？本当の名前も知らないのに！」

「やめて！呪いが・・・何か悪いことがおこるかもしれないじゃない。」

「わかった。その名はもう口にしない。俺が悪かった。」

今現在、大魔王ゾーマの名は伝わっていない。大魔王と口にすることすら禁忌とされている。口にすることで蘇るかもしれないと無意識に恐れられている。

「話が逸れたね。考察を続けよう。魔法の詠唱文の一小節目についてギラ、ラリホー、マホトーン、トヘロスこの4つは同じ。ではこれらの共通点は？」

またマギーが首をかしげている。この顔が見たくて俺は毎日のように魔法談義をしているようなものだ。

「わかった。消費するMPだ。数値化はされていないが消耗が近い。」

「正解！まだ魔法を覚えての頃やらなかったか？自分はホイミを一日に何回使えるか？ギラなら？ラリホーではって。」

「やったわ。最初ホイミは2回しか使えなかった。でもギラは4回使えたわ。ホイミが3回使えるように成ったらギラは6回使えるようになった。ホイミはギラの2倍疲れるって言ったら大人が驚いた。」

「またまた正解。ちなみに具体的に数値化すると俺数値だがホイミは4MP、ギラ、ラリホー、マホトーン、トヘロスは2MP、レミールは3MP、リレミトは6MP、ルーラは8MP、ベホイミは10MP、ベギラマが5MPだ。」

「ちょっと待って、記述が間に合わない。もう！ここに書いて。」

「了解。じゃあその共通する3MPという部分が詠唱する文節にあるか？」

俺はさっきの消費MPを紙に書きながら質問する。またマギーは俺が好きな顔で考えている。

「うん。あるわね。」

マギーの目が輝いている。ちょっと俺は意地悪をする。

「さて、じゃあ俺から質問。今俺が答えを持っているとする。君はその答えを知りたいか？」

「駄目！そんなカンニングみたいなことしたくない。」

「OK！じゃあヒントをあげよう。詠唱2小節目3小節目は全ての魔法で一致する。さてこれはいかに？」

「もういいわ。自分で解明してみる。時間はあるから。」

この勝気な感じもたまらないな。多分答えを教えたら二度と口をきいてくれないだろう。手元の紙に詠唱文をかきながらうんうんうなってる。俺も昔やったな。口述するのが日本語だとしたら、詠唱は英語みたいなものだ。意味が分からないから片仮名で詠唱する。口伝なので発音の仕方もある。元々口伝は外国人みたいなものだから言葉も苦労しただろうし、魔法に使われる特殊言語に至っては説明するのは不可能だったに違いない。数ある魔法の詠唱文の解読は大変だったな。数ある魔法・・・そういえば開かずの間・・・あつできるかもしれない。

「そうだ。例の開かずの間、試してみてもいいかな。」

「はあ？あんた何言ってるの！昔から該当する鍵も見つからないし、有名な鍵師でも開けられないゆえに開かずの間なのよ！」

ここには開かずの間がある。ロトの時代より一切開けられていない開かずの間。鍵も無く万能鍵である魔法の鍵でも開かないから放置されている。その前には古い箱などが詰まれている無きものとされている。

「やってみaitことができた。もし開いたら報告する？」

「うん・・・しない。ここが騒がしくなるのは嫌！馬鹿が増える。」

「だよね。報告の義務はないし。じゃあ荷物をどけようか。」

小一時間埃まみれになつて荷物をどけた。

「もう！埃まみれ。これで開かなかったら荷物は自分で戻してね。」

「分かった。でも開いたら戻すのは手伝ってくれるってことだよね？」

「うっ！そう来る？いいわ！それでいい。」

扉の前に立つて鍵穴を確認する。魔法の鍵にあう大きさよりずっと小さい。しかもやたら複雑な形をしている。いけそうだ。鍵を探していたから開かないのだ。閉めたのはロトに違いない。ということとは閉めた鍵は最後の鍵、じゃあそれがなければなら、詠唱開錠魔法・

「アバカムッ！」

カチッ！シリンダーが400年ぶりに音をたてる。

「何？今の魔法。」

「ロストマジックの一つ開錠魔法アバカム。教えて欲しい？」

「意地悪ね。でもまだ駄目、私じゃあまだ早い。」

「君の意見を尊重するよ。じゃあ入ってみようか？」

開かずの間

400年の封印が今解けた。そこにあったものは・・・埃だった。そうだよ。400年も密閉しておけば埃ぐらい溜まるわ！後ろではマギーが布で口を押さえている。

「掃除をしないととても調査できないね。」

「そうね。でも誰がやるの？」

「そりゃあ俺達だ。他の人を入れるわけにいかないし。」

「じゃあ。新しいロープ買ってよね。汚れちゃうから。」

「いいよ、昔遺跡で見つけた絶対汚れないロープを進呈しよう。」

「やった！でもあんた一体何者なの？剣では近衛隊長に匹敵し、魔法を使えばまるでロトにつき従った賢者の様。」

「俺は戦う考古学者ケルテン。それ以上でもそれ以下でもないよ。」

「いいわ、それで。あなたらしいわ。」

それから埃を取るだけで2時間かかった。マギーのロープの袖は埃で真っ黒、二人とも頭が埃で真っ白だ。それで見つけたのは数冊の本と、小さな宝箱一つ。

「ねえ！なんか開かずの間にしてはしょぼくない？こんなに苦労したのよ！」

「それはこの宝箱の中身見てから決めようぜ。」

そう言つて10cm立方ほどの宝箱を空けた。中には紫色の布に包まれた鍵一つ。持ち手から伸びるただ一本の棒だけで一見してどんな鍵にもあつことはなさそうである。

「何これ？鍵にしては何の突起もないわね。使えるの？」

「そうだね。見た目は唯の棒みたいな感じだけどね・・・」

俺はそう言いながら先端を手で触つてみる。やはりそうだこの金属は不定形でいかなる形にでも変化する。

「うん。間違いないこれは最後の鍵。いかなる錠でも開けることのできるロトの秘宝。」

「えゝ！でも開かずの間の中にあつたら意味ないじゃない？」

「そうだね。だけどそれ故にここに置いた勇者の意思が感じられるね。きつと勇者はこの鍵もこの世界には不必要なものと判断したんだ。」

「この鍵も？どついう意味。含みがあるわね。」

「鋭いね。一字一句に引つかかるとは。」

マギーはその豊かな胸をはつて言う。

「馬鹿にしないで！それでもアレフガルドの賢者って言われたこ

ともあるのよ。」

「まあ賢者つてのは誇大だね。」

「単なる比喻表現よ！それはそうと話を逸らさないで。」

「ごまかせないか。うんじゃあまた俺の推察なんだけどロトの勇者達は可能なのに魔法や技術を伝承しなかったと思っている。」

「なんで？すばらしい技術は伝承するべきでなくて？」

「うんそうだね。君は善良で平和な人だからそう言うと思ったよ。」

「どういう意味よ！また馬鹿にしてるでしょ！！」

「いや褒めてるんだ。その考え方を忘れないで欲しいな。」

おれは肩をすくめて言う。

「ならいいけど、でも説明して！」

「例えば大人数を即死させるような魔法や一個大隊を一撃で爆死させるような魔法があるとして、それを君が嫌いな貴族のぼんぼんが覚えたとする。さらに今現在竜王がいらないとして彼らはその魔法を何に使うだろうか？」

「そんなの敵がいらないのだから使い道ないわ。」

「残念。答えは言うことを聞かない相手に使う。」

「そんなひどいことするわけないじゃない。」

「そう？君も貴族の御令嬢だから判つてると思うけど、言うことを聞かない奴隷や家来に暴力を振るう貴族は少なくないよね。」

マギーはその口に両手を当て驚きの声を上げる

「あっ！」

「そう。力の大きさの違いだけでやることは変わらない。現在リムルダールとメルキドが自治区になっているけど、このことを苦々しく思う人間は少ないと思うよ。城側の意向はできるなら直轄地に戻したいし、自治側は最終的に独立を考えているかもしれない。これらの解決策に力は必須なんだ。」

「判った。もういいわ。」

「そう。続けるね。多分ロトは今言ったことを理解していたんだ。残念ながら彼の旅路はモンスターとだけの戦いではなかったからね。だからこそこの地ではその力を封印した。彼らの死後それらの力が使用されないようにね。」

「なるほどね。でもあなたはそれを掘り出して使えるようにしているのはロトの意思に反しているのではなくて？」

「うっ！耳が痛いね。でも各地に古文書なり口伝による伝承者がいたのは、再びこの地に災厄が襲ってきたときの為だと思うんだ。彼は災厄の復活を予言していたから。」

「そういえばそうね。じゃああなたはいいことをしているんだ。」

「さてね。もしかして豹変してこの国を征服するかもよ！」

「フフフツ！じゃあそのときは私があなを殺してあげる。」

「怖っ！心しておくよ。死にたくないのね。」

プツ！あっはっはツ……。その雰囲気になんて耐え切れず
二人は笑う。

「はあ。こんなに笑ったのは久しぶりね。でもあなたはさっき言った魔法も使えるのね。多分。」

「怖い？」

「いえ。あなたは力の使い方を知っている人だと思うから怖くないわ。」

「ありがとう。」

あれっ！目から涙が……。悲しくなんかないのに？気が付くと俺の頭はマギーの胸に抱かれていた。しばらくそのまま時間が過ぎる。

・ ・ ・

「はあ！なんかゴメン。」

「いいの。あなたにも弱いところがあるのがわかってうれしいわ。」

「うわゝなんだか恥ずかしい。俺が俺じゃないみたいだ。」

急に我に返つてのたうち回る。そんな俺の肩をポンとマギーが叩く。

「なんかあつたら私に相談しなさい。お姉さんが相談に乗ってあげる。」

「うん、そうするよ。お・ね・え・さ・ん!」

「君にお姉さんと言われるとなんかむかつく。やっぱそれ無し。」

そして二人で今日二回目の大笑いをした。そうだね。俺18、マギーは22、それは言っちゃ駄目だよな。

「とりあえずここを出ようか。また日を改めて調べるから。」

「そうね。お風呂にでも入りたい気分。」

「じゃあマイラにでも行く? いい温泉知ってるよ?」

「きつと君のことだから行けるんだね。もう何を言われても驚かなくなっちゃった。」

「うん。行けるよ。これも知りたい?」

「止めとく。今日の宿題ができてからでいい。でも温泉には行きたい。」

「OK!ではこの鍵は君に預けておく。俺には必要ないからね。」

「でもこんな大事なモノ!」

「君に持っていて欲しいんだ。二人の秘密さ。」

「わかった。絶対身から放さない。」

二人は開かずの間改め、ロトの部屋を後にした。

マイラの温泉は行ったのかって?もちろん行ったさ。1泊して城に戻った。

何?昨夜はお楽しみでしたね?うるせーよ。

開かずの間（後書き）

魔法の詠唱、時代考証等作者の勝手な妄想です。ご了承ください。

勇者二人

あれから3日が過ぎた。勇者ガルドはマイラ近郊で狩りをしている。まさに狩りだ。両手持ちの斧を振ってほぼ一撃でことが済んでしまうとはすごい臂力だ。もしかするとこちらからSかもしれない。期待できるかもしれない。城に戻ってきたら面談することにしよう。

さて我が弟子アレフだ。朝一で俺の部屋にやってくると、ぜひ見て欲しいことがあるとうれしそうに言う。それで訓練所に来て、今俺の目の前で素振り100本10セットを終わらせた。

「これは驚いた。まさか3日でできるようになるとはね。」

「その気になれば20セットでも30セットでもできますよ。多分。」

まじか。才能って怖いね。多分って言うけど嘘だね。やったんだ。無茶をする。この訓練の最大のからくりはホイミにある。無理な負担を筋肉にかけると筋繊維が断裂する。それをホイミで強引に直すとなんと超回復する。

「よしっ！ではその木偶を斬ってみ。」

アレフは木偶の前に立つと鉄の剣をすらりと抜く。そして構えから一気に振りぬくと即元に戻す。元に戻した後得意げにこちらを見る。俺は斬られた木偶に近づき確認する。麦わらを切り裂いて芯棒を挟んでいる。もし人の腕なら骨までいつてるな。

「合格だ。わざわざ言わなくても自分で判っているようだし、次の

ステップへ進むか。」

「はい！でも一ついいですか？」

「何？何かわからないことでもあるの？」

「違います。ケルテン師匠が斬るのを一度見てみたいのです。」

「えっ！木偶を？」

「はい！」

俺は頭をぼりぼりと掻きながら答える。

「あゝなんと言つか。後で怒られるんだ。備品を大事にしろ！ってね。」

「はあ？」

「だよね。そういう返事しか出てこないよね。判った。一度だけ見せる。」

刀を抜いて中段に構える。気合と共に斬りつける。そして残心。刀を納める頃、袈裟がけに斬られた上半分がすべり落ちた。アレフの顔が壊れた木偶と俺の顔を往復する。さらに斬り口を見ている。

「もうやらないよ。もったいないからね。」

「どうやったらこんな斬り口になるんですか？私にもできますか？」

「無理だね。武器が違う。君達の武器は叩き斬る武器、俺のは斬る武器。振り方も全く違う。だから同じことができる必要はない。」

「でもそれ使ってみたいです。」

「駄目。さつきも言ったように振り方が違う。君の振り方で使うと折れる可能性がある。これはちからの弱いのを力バーする為に特注した俺だけの武器。だから駄目。」

「そうですか・・・。」

「そう残念そうな顔をするな。純粋なちからならアレフ、君の方がずっと強い。俺の力はC評価、君はB評価、しかもまだ伸びしろがあるからもしかするとA評価もありえるかも？」

「A評価、B、C????なんですか？それ。」

「ああ俺独自の評価だ。ちから、すばやさを大体5段階でする評価だ。もちろんAが上でEが一番下だ。」

「はあ？」

「ちなみに君はB、B-ってところだ。伸びればA-、Bぐらいになれるかもしれない。」

「そのマイナスってのは？」

「ああ、同じBでも幅があるからね。Aに近いBはB+、Bに近いAはA-と表現しているだけ。まあ人はその日の体調や心理で多少上下するから参考までの評価だ。」

「面白い評価基準ですね。考えたこともなかったです。それでケルテン師匠は？」

「俺か？まあ、Aてとこかな。結構鍛えたけどこちらからはこれ以上伸びなかった。素質の問題らしい。ちなみにちからは鉄のフル装備ができるぎりぎりぐらいだ。もっともそうすると重くてせつかくのすばやさが生かせない。本当は攻防バランスのとれたいい装備なんだけど、死にたくないからその装備はしない。」

「なるほどよくわかりました。この装備が私には適していると言うことですね。」

「そういうこと。では次のステップだ。まず武器を納めて両手を下げ自然体で立つ。」

アレフは言われたとおり立つ。鉄の剣は腰に納められ、左手の盾は逆さまになる（盾は左上腕部に固定されている為、使用時には左手で握り手をつかみ、腕を上曲げなくてはならない。）

「まずそこから抜剣しつつ斜め上に斬撃。」

アレフはシュパツと音を立てて抜き撃つ

「次、いつもの斬撃、即納剣。」

残撃はいいが納剣でもたつく。まあそんなところだろう。

「これを100本。シュパツ、シュ、シャキンぐらいのタイミングでできれば完璧。ああ剣を納めたら必ず自然体に戻る。」

「むずかしいですね。手本を見せてもらっていいですか？」

「いいよ。」

おれは自然体から居合いで逆袈裟、振り上げた所で両手持ちで袈裟懸け、そして納刀。自然体に戻す。ん！いま一瞬殺気？を感じた。

「流れるようですね。武器を戻すことの意味は？」

「あちよつと待つて。その影にいる方、見るならこちらでどうぞ。ここは訓練所です。見られて困ることはありません。」

建物の影から体格のいい大男が出てくる。

「わりいわりい。別に隠れてみるつもりは無かったんだが、なんか昔師匠に教えられたようなことやってるなって思わず脚が止まった。ってお前学者じゃないか？懐かしいな。」

「もしかして達人ですか。2年ぶりくらいですか？」

こいつはサバイバルの達人（俺がつけたあだ名だ。俺のあだ名をつけたのはこいつ）薬草学が得意な武闘家。アレフガルドを旅してまわったときよくつるんで冒険したのはいい思い出。互いに右腕を当てて挨拶をする。

「なんであなたがここに？」

「おまえこそ？」

「今月から大臣の下で勇者の支援をやっています。」

「奇遇だな。俺はその勇者をやっている。2月からだ。」

「あのくすみません。」

いかにいかに。あまりに懐かしくて自分の弟子を忘れていた。

「紹介します。彼はガイラ・ガラ・ライガ、古い友人です。無手で闘う流派の末裔です。ガイラ、彼が私の弟子のアレフです。彼も勇者です。まあ見習いですが……。」

「なるほどねえ。お前さんが弟子をとったとは……。」

「いえ。ちょっとありましてね。推しかけ弟子といつかなんと言っていたいやら。断れなくてですね。」

そこにアレフが口を挟む。

「挨拶が遅れました。師匠ケルテンの弟子アレフです。よろしくお願いします。」

「おう！俺はガイラ。武器も持てねえ、魔法も使えねえが拳一つで勇者やってる。しかしまあお前さん見る目あるよ。いい師匠もったな。」

「私もそう思います。ガイラさん。」

「アレフ俺のことはガイラでいい。さん付けされると背中がむず痒くなる。」

「わかりました。ガイラ」

「おう！それでいい。しかし学者よ。さっきよく俺がいたのに気づいたな。そっちらからは見えない位置だったはずだが？」

「ええ！さっき刀を抜いた瞬間、殺気を感じました。」

「ああ一瞬反射的に構えたな。お前さん実は強かったんだな。一手お手合わせ願いたいものだな。」

「嫌です。多分命を懸ける勝負になります。まだ命は惜しいですから。それにまだ授業の続きがありますし。武器を納める理由でしたね。アレフ君。」

強引に話を戻す。

「はい。戦闘が続いているならそのままでも良さそうですし、終わったならそれこそ急ぐ理由は無いとおもいますが？」

「最もな意見です。でもアレフ君、武器を持ったままで魔法は使えますか？」

「無理ですね。私は右手を使わないと魔法は出せません。」

「だろうね。だから武器を納める練習をします。まさか魔法を使う度に武器を棄てるわけにはいきませんから。」

「そうですね。あまり戦闘中に魔法を使うことはありませんでしたから。」

「これは私独自の解釈です。あまり他にやってる人はいないでしょうね。じゃあ練習あるのみ。」

アレフは練習を再開する。やはり納剣にもたつく。これだけは慣れないと難しいだろう。俺とガイラが暖かい目で見守る。数回繰り返し返してアレフが手を止める。こちらをふりむくと

「質問です。毎回自然体に戻す理由は？」

「ああ！それはな常在戦場ってやつだ。うちの流派でもよくやらされた。」

「ジョウザイセンジョウ？」

「常に戦場に在りって意味ですよ。どんな時でも対応できる様鍛錬するんです。」

「そうだ。アレフ。氣い抜いてると死んじゃうぞ。」

ガイラはそういうながらアレフに向かってとことこ歩く。そして直前で流れるような正拳突き。もちろん顔面に寸止め。

「わっ！」

「もし今に対応できたら、私からは免許皆伝です。それとガイラ、私には止めてくださいね。反射的に刀で受けてしまいそうです。」

そういうながら刀を半分抜いて目の前に鞘ごと構える。ガイラがむうと唸る。

「ではアレフ。後は自分で練習して下さい。とりあえず一週間はいつもの素振りを10セット、その後この練習を10セット行なって下さい。ではガイラ、積もる話もありますからあちらで話しましょう。お茶ぐらい出しますよ。」

そして二人で食堂に向かって歩く。ガイラが軽口を叩いた。

「しかしまあ、お前さん鬼だな!」

「なにが?」

「なにがってさっきの鍛錬だよ。ありゃきついぜ。根をあげても知らないぜ。」

「いつでも止めていいと伝えてありますよ。ただ今のまま放り出したら死にます。そうなる前に勇者を止めさせるか?自分で強くなるか?それだけです。」

「優しい鬼だな。」

「鬼ですか?私は桃太郎に退治されたくないですよ。」

「言うねえ。しかし桃太郎を知ってるとは博学だね。さすが学者だ。」

・
・
・

積もる話はしばらくやむことはなかった。

裏の事情

5 / 6 勇者支援官6日目

日課のトレーニング、日課の師匠の真似事、その後の食事。そこにサイモンがふらふら現れる。少し痩せたか？げっそりして目の下に隈ができています。

「よう！サイモン、久しぶり。4日ぶりか？何してた？」

サイモンが俺の前に座り、テーブルに突っ伏す。

「うー行軍訓練でガライまで行ってた。今帰ってきた。お前のせいだ。」

「何でだよ！理知的に説明して頂きたいな。」

「この間ここで大盤振る舞いしただろう。あの後隊長にばれて大目玉だ。お前のせいだろ。」

「あほか、全部自業自得だ。でもまあ徒歩3日でガライ、ルーラで戻ってお釣りが来る日程だろうが。」

「違う違うんだ、往復で4日。しかもフル装備、物資無しで一個中隊の行軍。しかも俺が中隊長で全員任せたって俺達だけで行かされた。死ぬかと思っただぞ。」

「なるほど、それはすごい。たるんだ馬鹿にはちょうどいい。」

ラダトームの軍組織は次の通りである。小隊長が3人の部下を率

いて一個小隊。それを4隊で一個中隊。一名が小隊長と中隊長を兼任する。同じく4部隊をまとめて大隊とする。この頂点に立つのが近衛騎士隊長である。つまり近衛騎士は64名しかいない。ただそれだけでは足りないので一般兵士がもいる。さらに必要に応じて民兵を雇うこともある。

先の戦いで近衛の約半数が失われ、かつ先の近衛隊長も無くなったらしい。その後就任した今の近衛隊長は当時生き残った最高位で、身分などうるさい近衛の中ではめずらしい叩き上げだ。普段は結構気さくでフランクな人だが怒ると相当怖いようだ。

行軍訓練。総員で隊列を組み目的地までひたすら歩く。ただフル装備、物資無しというのはまず鉄の剣、盾、鎧を着込み、更に野営用の荷物を背負う。総重量は約50kgぐらい、俺には絶対無理。さらに最低限の水しか持たず食料は現地調達、もし手に入らなければ無しの過酷な行軍だ。もちろんモンスターは出現する可能性はある。まあ殺気だった16人の兵士を襲ってくる魔物はガライまでにはないだろうけど。

「今日は一日休息が許された。部屋帰って寝る。」

サイモンがふらふら出て行った。

- - - - -

俺は近衛控え室に来ている。隊長に聞いてみたいことがある。隊長室をノックして入室する。

「聞きましたよ、アイゼンマウアー隊長。」

「何をだ？ケルテン特務隊士。」

近衛隊長も心なしかやつれている。やっぱりな。

「行軍訓練ですよ。大変でしたね。」

「ふん！たるんだ連中を引き締めたただけだ。俺はなにもししていない。」

「そうですか。でも隠れてついでに行ったのは秘密ですか？」

「知らん、なんの話だ。雑談ならまた今度にくれ。書類仕事が溜まっている。」

この人なりの照れ隠しだ。しかし語るに落ちてるよこの人。

「まあそういうことにしましょうか。勇者について聞きたいことがあつてきました。」

「俺に答えられることなら答えよう。」

「ええ、先日落第勇者に言われまして、お前が勇者やれってね。これは駄目ですか？」

「それは駄目だ。」

「即答ですね。不足しているのは力量ですか？それとも器量ですか？結構自信があつたのですが。」

「そのどちらでもない。正規の軍人は勇者にはなれない。」

「なぜ？と聞いてもよろしいですか？」

「ふむ、ここからの話は極秘になるがよいか？」

「結構口は堅い方です。」

「よろしい。少し話しが長くなる。あちらで話そうか。」

隊長はソファに腰掛ける。隊長が座るまで俺は立っている。

「まあかけてくれ。」

「はっ！では失礼します。」

「ではさっきの話だが、ローラ王女が誘拐された件と関わりある。」

「話の先がみえませんか？」

「そう結論を急ぐな。その後竜王側より秘密裏に交渉があった。」

「交渉ですか？身代金とか、降伏勧告ですか？」

「君は頭がよすぎるな、まあ聞け。そうではなかった。あちらの要求は一つ。双方の軍事活動の停止。」

「はあ？でもまだ対立は続いてますよ？モンスターは相変わらず襲ってきますし、こちらにも勇者を派遣してます。」

「そうだな。詭弁、茶番、俺の嫌いな政治的駆引きらしい。」

「政治的駆引きですか？ということは交渉は大臣がなされたので？」

「そうだ。先の戦でこっちもかなりの犠牲があつたが、あちらも結構な損害があつたらしい。ドムドーラを落としたとは言え何か手に入つたわけでないからな。」

「なるほどラダトームは必死の攻防で追い返し、メルキドは城砦とゴーレムで、リムルダールは湖とちよつとした小細工で侵攻を止めた。」

「ほう、話には聞いていたがあれはお前の仕業か？」

「何の話です？まあ街が無事だったのです。よかったではないですか？」

「よい、そういうことにしておこう。で、これは想像の域をでないがあちら側はこちらの最大の利点を潰すのが目的と思われる。」

「最大の利点？」

「わからぬか？では聞こう。個々の強さでは我ら人間と魔物どっちが強い？」

「なるほど。個々の強さに自信のある魔物は人間の集団連携を恐れ、封印した。」

「そうだ。王女の命を盾に取られてはこの要求を吞まずにはおれなかった。」

「では今現在暴れている魔物は軍事行動ではないのですか？」

「それが詭弁だ。あちらが言うには個々の魔物全てが言うことを聞くわけではない。竜王様の崇高な深慮が理解できぬおろか者がいないとも限らないと。」

「ひどい詭弁ですね。主は知らない、馬鹿が勝手にやっているだけだとはね。それでこちらと同じ様なことが起きているだけだと言っている。」

「そうだ。だからお前は勇者にはなれない。2ヶ月前ならなんら問題なかったのだがな。」

「じゃあ今止めて勇者になるのは？」

「それも駄目だ。忘れたか？お前は3年10万Gの契約金でここに来たのだぞ。」

思わず天を仰ぎ見た。そういえばそうだった。

「去年のリムルダールが大変だったのは承知しているが、残念ながら契約は契約だ。あきらめろ。」

「もしかして3年後がないかもしれないのに？」

「そうならないようお前はお前の仕事をしろ。有望な勇者を育成しているらしいじゃないか？」

「なんだ耳に入っていましたか？有望かどうかはこれから判ります。」

駄目なら放逐します。死なれると目覚めが悪くなります。」

「さて話は終わったようだな。飲み物を用意させる。誰かある！」

それから二人でしばらく武術談義に花を咲かせた。

- - - - -

「アイゼンマウアー隊長の長剣は支給品ではありませんね。ちよつと見せてもらってもよろしいですか？」

「そうだな・・・お前の刀とやらを見せてくれるなら？」

互いに腰から武器を外して交換する。俺のは刃渡り80cmの大刀、隊長のは拵えが立派な長剣だ。

「すごいな、これはまるで剃刀のようだ。どこで手に入れた？」

「特注です。仔細は秘密です。この長剣もすごいですね。全てミスリルできていて魔力も感じられる。由来を聞いてもよろしいですか？」

「秘密だ。・・・ふっ！冗談だ。一族伝来としか聞いていない。俺は貴族の生まれじゃないからな。代々雇われ戦士の家系にはすぎた一品だが気に入っている。」

結構古い。拵えの様式からすると多分これは・・・確認してみるか。

「代々と言われますが、どの程度遡れますか？」

「家系図があるわけではないから詳しくはわからないが、400年
口トの時代までは遡れるらしい。」

間違いない！確信した。この剣の銘は？

魔法の武器

一息ついてからおれはしゃべりだす。

「判りました。この剣の銘は雷神の剣。ロトに付き従った戦士の振りです。間違いはないかと。」

「なんとそのような謂れがあつたとは・・・。」

「もう一つ確かめたいことがあります。少し時間をいただけますか？」

「ああ、ここまで聞いたら全て知っておきたい。」

「ではここでは狭いので訓練所で。」

近衛隊長と俺は数名の兵士を引き連れて歩く。すれ違う者が何事かと目をみはっている。俺達の緊張が伝わっているようだ。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

訓練所で俺は木偶を4つ横に並べた。10mほど離れて構える。俺の後ろには近衛隊長を先頭に人の山ができている。

「業炎よ！わが敵を焼き滅ぼせ！」

そう言い放つと剣で弧を放つ。的になった4つの木偶が業炎に燃え尽きた。炎はしばらく消えない。自然に火が消えるころ歓声が上

がった。

「なんだ今のは！」

「あんな魔法みたことないぞ。」

俺は振り返ると雷神の剣を隊長に渡す。

「お返ししますね。間違いありません。雷神の剣です。大事にして下さいね。」

「嗚呼。なんと言っていていいか分からないがありがとう。本当にありがとう。」

「その武器を持つに相応しい人がその武器を持つ。当たり前のことです。」

俺と隊長は感動している。

「おい！今のはなんだ。説明してくれ！！！」

外野うるさいな。せつかくの感動のシーンを邪魔するなよ。今二人はロトの時代を旅していたのだぞ。收拾がつかないようなので説明することになろう。

「これは雷神の剣といえます。ロトにつき従った戦士の剣です。剣に宿る魔力を先程の様に放つことができます。炎の剣と同じようなものです。正確に言うると炎の剣はこの剣のレプリカですね。だから宿る魔力が小さい為、小さな火の効果しかありません。」

「なんでお前にそんなことわかるんだよ。見てきたわけでもないの

に！」

「文献を読み、正しく推理する。それで分かることもあります。隊長には後でパワーワードを記述してお渡しします。」

ここで俺は手をパンツ！と叩く。

「はい、余興はもう終わりです。皆さん、仕事にお戻り下さい。いつまでも遊んでいると地獄の行軍訓練が待ってますよ。ねっ！アイゼンマウア・近衛騎士団長どの。」

俺は片目を瞑って、隊長に話しかける。それで皆蜘蛛の子を散らすように散っていった。しかし、その中から女性の声が飛んだ。

「ちょっと！こっち来なさいよ。」

マギーが俺の腕をとって強引に引っ張る。周りの視線を全く気にしないで俺の手を引くように歩く。おいおい簡便してくれよ。

「何なに？もしかして怒ってる？」

「うん、怒ってる。私のいないところで知識を披露しないで！」

「何それ？どんな嫉妬の仕方だよ？」

「いいの！私だけ知らないなんて許せない。」

「わかった、わかったよ。じゃあ詳しく説明するから図書館へ行くか。先に行ってくれる？部屋に取りに行くものがあるんだ。」

「いいわ。でも何持ってくるの？」

「それは後のお楽しみ。じゃ10分後にまた。」

俺は自室に戻り荷物を漁る。確かどっかに片付けたはず。

- - - - -

王立図書館。ここはいつもマギーと俺しかない。その他のマギーが目当ての男はマギーが追い返すから俺がいないときはだいたい一人で何か読んでいる。最近はペンを片手に紙と格闘している。

「何から知りたい？さっきの剣？約束のプレゼント？それともこの間の宿題？」

「当然もらえる物が先。ちょうだい。」

「まったく現金だな。とっておきの品だ。驚け！」

手にしていた包みを開くと半透明な水色の布を取り出して手渡す。マギーが手に取り開いた。

「何これ？ローブ？スケスケじゃない。」

「いや透けないから大丈夫。それは水の羽衣。炎のダメージを減少する効果がある。昔、雨の祠の集落で見つけた。多分勇者一行の女僧侶が着ていたローブじゃないかな。」

「そんな大事な物いいの？」

「いいさ。どうせ俺は装備しない。かさばる装備は俺にはあわない。」

「ありがとう。大事にするわ。でもさっきの武器もそうだけど今では売ってないよね。」

「そうだね。じゃあさっきの武器の話も含めて講義しようか。実はロトの時代の前には今より優れた武具が存在していた。例えばラダム王家の国宝、王者の剣、光の鎧、勇者の盾は順にオリハルコン、ブルーメタル、ミスリルで作られていて、これらの素材は通常では溶かすことができないとされている。ではどうやって加工したのか？」

「そんな武器や防具聞いたことないし、溶かせなければどうにもならないわ。もしかして魔物の技術とか、人知を超えた技術じゃない？」

「ああ、それもあるね。大体正解。答えは神々の技術、神々が自らの武具を作成させる為技術を貸した。もっとも調子にのったある国はその後神々に滅ぼされるのだけど、まあそれは別の話。」

「でもなんでそんなこと分かるの？」

俺はある棚の前まで歩き古ぼけた一冊の本を取り出した。

「アイテム図鑑。はるか昔から伝わる幾つかの話が載っている。童話みたいな本だが結構面白い。暇があったら読んでみるといい。」

「ふん。こんな本あったのね。確かに挿絵とか童話っぽい。」

手にした本を開いて中をパラパラめくる。彼女が本を見る目はいつも輝いている。

「まあね。で、さっきの王家の秘宝の話、今は別の名の方が有名だ。ロトの剣、ロトの鎧、そしてロトの盾だ。ただし今現在は所在不明。とても残念だ。」

「そう。でも見つけることができれば竜王も倒せる?」

「さあ?それは分からない。強い武器を持つだけで強くなれるわけじゃないからね。」

「そんなの知らない。武器なんて握ったことないもの。」

「君はそれでもいいさ。でも武具によつては魔法と同じような効果を持つ物がある。さっきやった雷神の剣とかね。」

「でもあんな魔法見たことない。」

「いや君は一度見てるよ。本の挿絵でね。」

「えっ! ああ、この間のギラ・・・でも炎の大きさが違う。」

「うん。挿絵のはギラだったね。でもさっきのはベギラゴン。ギラ系の上位魔法だ。」

「でも、ベギラマはギラの上位魔法だって・・・。」

「言ったね。正確にはギラ、ベギラマ、ベギラゴンの順に効果が大

きくなる。」

「もう！いつになったらあなたの知識に追いつけるのかしらね。」

ちよつと拗ねた顔で俺を見つめる。

「まだまだだね。宿題はできたのかい？」

「また馬鹿にして。いいわ、研究の成果を見せてあげる。ちよつと待ってて資料取ってくるから。」

マギーはいつも座っている机に歩いていく。

魔法の武器（後書き）

長いので分けます。

美女と魔法談義 その？

準備される黒板、教卓、チョーク、支持棒、資料を教卓に積むマギー。

「ちょ！なにそれ。先生みたいだ。」

「もう馬鹿にして！それでも宮廷魔術師筆頭で弟子もいっぱいいるのよ。」

「あゝごめんごめん。そうだった。じゃあ先生質問です。3サイズは？彼氏いますか？」

「あのね〜そういう質問一番嫌いなんですけど・・・次言ったらぶつとばすよ。」

「冗談だよ。そういう質問多いんじゃないかって？」

「心配？」

「そりゃあ・・・まあ・・・心配じゃないって言ったら嘘になるかな？」

「もうはつきりなさいよ！いいわ！では講義を始めます。今日は魔法の詠唱についてです。」

チョークのカツカツ言う音が響く。結構手馴れている。書かれているのは4行のギラの詠唱文だ。次に比較し易いようにラリホー、マホトーン、トヘロスを並べて書く。少し離してホイミも書く。

「まず第一にほとんどの呪文は大体4小節でできています。その後
に呪文の名前を口にすることで発動させるのが基本です。」

ここで確認するかのように俺をみる。俺は無言で頷く。

「実は全ての魔法の詠唱において第2小節はまったく同じです。さらに第一小節は一部を除いて一致します。しかしこの4つの魔法はその全てが一致します。」

ここで言葉を止めて俺を見る。心なしか心配そうだ。

「いいよ。続けて。」

「ここで一度魔法の使用法の基本をおさらいします。」

？自分のうちにある精神力、通常MPを放出

？自然に存在するマナとMPを合成

？魔法によっておこる現象をイメージ

？目標を決定し呪文を唱える。」

ここまでを先の4小節の横にわかりやすく書く。

「これらから、第一小節は消費MPの決定、放出を第二小節はマナとの融合を司るものと考えられます。先に提出された資料から、この部分は2という数字を意味する単語である可能性が高いでしょう。またホイミのここは4の単語と思われます。また他の魔法から3、5、6、8、10の単語が導き出されます。」

パチパチパチッ！俺の拍手の音が鳴り響く。

「だいたい正解。大筋で翻訳するところだ。

？私はMPをX放出する

？MPとマナは融合し万能なる力となれ

？おお万能なる力よ、Aとなり

？Bを、Cせよ。呪文名。

という感じだね。Xは数値、君の言うとおりだ。Aは効果イメージ、たとえば火球、稲妻、癒し。Bは目標、ここには触れていなかったけど我、かの者、かの空間など目標の設定、CはAに類似したイメージした放出方法、焼け、撃て、癒せなどの命令系の言葉になる。」

「ちよつとそこまでは分からなかったわ。参考資料が足りない。」

「じゃあご褒美をあげよう。」

俺は本棚から真新しい本を一冊取り出し、手渡す。

「何これ？こんな本この間までここにはなかったわよ？」

「この間の宿題出した後に置いといた。俺が書いた世界に一冊しかない魔法の本だ。」

「意地悪ね。」

「法則性、違和感とかに気づかないと学者として失格だね。精進あるのみだ。」

俺の軽口を無視したふりでマギーは本を開く。目を丸くしている。そりゃそうだ。その本には全ての魔法が原文で書いてある。

「まったく読めない。でもさっき魔法の本って言ったわね。」

「言ったよ。１ページに一つずつ魔法詠唱文が大きな字で書いてある。」

「意地悪なのか？親切なのか？判断に悩むわね。」

「そう？君もやらない？有望な生徒を答えに誘導したりしてしない？」

「やる。でもやられるとむかつく。」

マギーが目の前でムキー！ってなってる。うわっ！めちゃくちゃかわいい。

「よし、では教師と生徒交代だ。テキストはそれね。７ページを開いて。」

「当然読めないはね。でもちょっと他のページと違う。下にいくつかの単語が並んでいる。」

「その通り。よく気づいたね。」

「さっき言われたばかりだからね。法則性と違和感だったかしら？」

「脱帽です！お嬢様。」

そう言いながらかぶってもいない帽子を脱ぎ、一礼する。

「続けようか。実はそのページはルーラだ。」

「ルーラ？こんなにいろいろ書く必要あって？」

「うん。今のルーラは城に戻る魔法とされているけど、本来は指定した場所に行く魔法だ。」

「この間マイラに行ったのがこれね。ねえ、じゃあなんで普通のルーラはラダトームにしか戻れないの？」

「それはラダトームを指定しているから。下に指定場所の登録名が書いてある。一番上がラダトーム。別の言語で地下の城という意味。」

「地下？意味深ね。」

「文字通り、勇者はこの世界に落ちてきたからそう名づけた。」

「名づけた？もしかしてルーラの指定場所は勇者が登録したの？」

「その通り！勇者が訪れた場所にある魔法儀式を行い、登録名を決めた。そこにあるのがラダトーム、マイラ、ドムドーラ、メルキド、リムルダールだ。ああドムドーラに取り消し線引いという。」

「取り消し線？」

「もう使えない。多分座標指定石が破壊された。該当する魔術儀式はまだ解明できていないから仮名ね。でもその基準はなくなったら困るでしょ？だから人の力では動かせないくらい大きい石に魔術儀式で登録名を掘り込んでいる。」

「へえ、すごいね。でもなんで普通に名前じゃないの。ラダトームって書いておけばいいのに！」

「便利すぎるから駄目。その気になれば何人の兵隊でも送れてしまう。多分勇者はそう考えて自分達の専用魔法としたと俺は思っている。」

「ふーん。徹底した平和主義者ね。自分が死んだ後まで心配しすぎじゃない？」

「ははっ！まあ尊敬する勇者様のことは置いて、まずそのページから学習してごらん。他の魔法の解説に参考になるよ。」

「そうね。他のページはどれがどの魔法かさっぱりわからない。あれ？ちょっと待ってその勇者専用の登録名はどうやってわかったの？またどこかの遺跡でも見つけたの？」

「外れ！その基準石に書いてある。普通は見えないけどレミーラで照らすとうつすら見えてくる。魔法による隠し文字だ。実は王家の秘術：血の契約書にも同じからくりがある。結構えぐいことが隠して書いてある。これは絶対秘密ね。ばれたら消される可能性が高い。」

「じゃあそんなこと教えないでよ。」

怒ったような顔でおれを見る。怒った顔も美しい。もうちょっとこの顔が見てみたい。

「あともう一つ。そこには書かなかったが実は竜王の城にも基準石がある。」

「え！じゃあ行けるの？」

「行けるよ。でもこれは勇者が置いたものではない。じゃあ誰が置いたのでしょうか？」

「それは簡単ね。魔物が帰るために置いた。」

「その通り。だから以外な名前が登録されていた。知りたい？」

「まあ教えてくれるなら。」

「じゃあ言うよ。怒らないでね。勇者達とは違う言語で『大魔王ゾーマ様の城』って書いてあった。」

あつと驚く。そりゃね禁忌中の禁忌とされ、しかも伝わっていない名前が耳に入ってしまったから。

「ああ、もう最悪。それは言わないでって言ったじゃない！」

「教えてっていったじゃない。それに今更恐れることなんかないさ。」

「どういう意味よ！」

「もう第二の魔王が現れているんだ。これ以上悪いことは起きないさ。第三の魔王が現れるにはまた200年ぐらいかかるのさ。」

「何それ。今度は預言者のつもり？過去から未来まで全てあなたのもののかしら？」

俺は預言者じゃない。ただ知っているだけ。でもこれだけは教えない。

しばらく沈黙が続く。

「まあまだ来ない未来の問題は未来の住人に任せよう。今はその問題を解くのが先、レポートにして提出してね。期限は特に決めない。随時質問には答える。途中経過を披露してくれてもいい。」

「わかったわ。絶対負けない。あなたの知識は全部私のものにしてあげる。」

俺は退室することにした。彼女が本に集中しだしたらもう誰の声も聞こえなくなるから・・・。

落第勇者

5 / 7 勇者支援生活7日目

いつも通りのトレーニングをする。横でアレフも剣を振っている。まだ納剣がぎこちない。結構な頻度で左手に刃を当ててしまいホイミで治療をしている。あれでMP足りるのかな。そうだ！

「おい！アレフ。そんなに昼から実践行けるのか？MP不足で危険じゃないか？」

「わかりますか？実は昼間までに大体使い果たしてます。まあここ近辺は強い魔物がいないので薬草数個ですみます。」

「わからんのか！ではいいことを教えてやろう。城の一階、中央十字路右から行った奥まった所にへんな爺さんいるの知ってるか？」

「・・・？もしかして祝福爺さんですか？」

「祝福爺さん！言いて妙だ。そうだ。昼から外に出る前に会ってからいくといい。」

祝福爺さん（アレフ命名）俺がアレフガルドで解けない謎の一つ。彼は基本『勇者に祝福あれ！』としか言わない。だけどMPが全快する効果がある。アレフが怪訝そうな顔をする。

「騙されたと思っていつてみな。じゃあ俺は終わったから行くよ。」

- - - - -
- - - - -
- - - - -

いつも通り朝食をとっている。起床6時、2時間のトレーニング、それから食事。もう10年近く続けている。なるべく生活リズムは崩さない。

「ケルテン殿よろしいですか？来客です。」

騎士見習いの一人が控えめに話しかけてくる。俺そんなに怖いかな。対外的には紳士なつもりなんだが。

「ああいいよ。ところで誰かな？」

「ゲオルグ、クロウ、ドーマンを名乗る三名です。」

「ああ彼らか。いいよ通して。」

「ここにですか？」

「かまわんよ。待たせるのも悪いしね。」

「判りました。では案内してきます。」

どうしたのかな？ガライに行く許可でも得にきたのかな？ならいいのだが……。そんなことを考えていると見習いに連れられて三人が入ってきた。ほう、装備が変わっている。先日教えた通り二人が革の鎧、革の盾になっている。武器は変わっていない。

「お久しぶりです。ご指摘どおり装備を整えました。近くで野営などの練習もしました。ガライへ行く許可を得たいのですが？」

言葉遣いも変わっている。最初からこうだったらよかったのに、つくづく惜しいな。

「いいよ。行っておいで。今いくぐらい持つてる?」

その言葉に三人の顔が曇る。

「ああ別に返せって言ってるんじゃない。どうせガライに行くなら鉄の斧を買った方がいいと思ってね。たしか560Gだったかな。」

「今500G弱です。だいぶ足りませんね。」

「そうだね。ガライで数泊するのと帰りの食料を考えると・・・OK!俺が200G貸してやる。」

「いいのですか?持ち逃げするとは思わないのですか?」

「そうだね。かまわない、地の果てまで追いかけて殺すから。何なら今すぐにでも・・・。」

俺は頭でザラキの詠唱を始める。第3小節まで唱え止める。なんとなく雰囲気で判ったのか三人は真っ青になって震えている。

「よく判りました。あなたに殺されるのは嫌です。のたれ死ぬ方がましな気がします。」

「判ってもらえてうれしいよ。ああ、それと俺に敬語はいらない。じゃあ、これ使って。」

俺は懐から200G出して渡す。

「お借りし・・・いや借りとく。必ず返す。」

「それでいい。がんばれよ！」

三人は食堂から出て行った。案内してきた見習いが突っ立ったままでいる。

「どうした？もう終わったよ。」

「先ほどの・・・いえ何でもありません。失礼します！」

なんだよ。別に逃げなくてもいいじゃないか。

その後騎士見習いの中に根も葉もないうわさが流れたのを俺は知らない。

視線だけで人を殺せる。

機嫌を損ねると死ぬまで追い詰められる。

そうだ。勇者ガルドはどうしただろう？後で調べることになろう。

- - - - -
- - - - -
- - - - -

国務大臣執務室

おっ！ガルドの光点が移動している。あいつの移動速度だと明日の昼には戻ってくるかな？ちょっと気になるから担当外の連中も見よう。

このリムルダールに向かっている一つだけの光る点はガイラかな。あとは雨の祠付近に四つ固まった光点がある。

「この4人の勇者はもしかして同郷ですか？」

「調べるがよい。」

はいはい、聞いた俺が馬鹿でした。書類を取り出し並べる。勇者12：エイブラムはラダトーム。勇者41：ローランド、勇者42：メルカバ、勇者43：レオパルド、三人ともガイライ出身・・・エイブラムがガイライで三人をスカウトしたと考えるのが妥当か。

「そんなに担当外の勇者が気になるか？」

「ええ、まあ気にならないことはないですが。」

「そうか。ならば勇者25もそなたが受け持て。」

ありや藪蛇だったか？勇者25ってガイラだな。あいつなら放っておいても大丈夫だ。

「はあ？かまいませんが理由を聞いてもよろしいですか？」

「ふむ。そなたの前任者は知っているか？」

「いえ、存じません。」

「2名いた。内1名は先月3月の勇者と共に死んだ。それで残るシユミットがあの4名の勇者を支援してある。勇者25は現在支援する者がおらぬ。」

「判りました。拝命します。」

よしリムルダールについた頃に会いに行こう。

模擬戦

5 / 8 勇者支援生活8日目。

いつも通りの訓練所である。昨日と違うのはアレフが少し興奮している。

「祝福爺さんのところ行きました。驚きました。MPが全快です。あれ何なんですか？」

「判らん。まったく判らん。調べても欠片もわからん。」

「ケルテン師匠でも判らないことあるんですね。」

「俺は全知全能じゃないよ。ただ判らないことは調べないと気がすまないだけだ。」

「もう一つ質問。この間魔法の価値が低いって言いましたよね。例えば距離とって逃げながら撃つとか、人数集めていきなり打ち込むとかすれば強くないですか？」

「もつともな意見だ。でも魔法は必中じゃない。あまり距離を置くとベギラマならともかくギラは当たらない。弾速が遅いからね。ベギラマでも身を隠せば当たらない。あと俺の本気の速さ、逃げられると思うか？」

「あゝそれは無理ですね。じゃあいきなり打ち込むのは？」

「まあそれは特殊な例だね。不意打ちで斬りかかるのと変わらないから。どちらにしる武器にしる魔法にしる使い方次第さ。ただ手段

は多い方が勝ちやすい。よしじゃあ手合わせしようか。ルールは殺す以外は何でもあり。」

「本当ですか？本気でいきますよ。」

「もちろんだ。武器も好きなのを使うといい。手加減なんざ許さない。」

俺はまわりで訓練している連中に声をかけて場所を空けてもらった。自然と人集りができる。

「よし。とりあえず互いの距離は10m。はじめの合図はその君にお任せします。」

アレフは鉄の剣、鉄の盾に革の鎧。武器を抜いて盾を前に出した左半身の構え、俺は腰を落とし居合いの構え。はじめの合図は鉄の剣で鉄の盾を叩く。ゴンと鈍い音がする。

アレフは俺の居合いの速さも間合いの広さも知っている。警戒しながらにじりよってくる。予定通りだ。

「ベギラマッ！」

居合いの構えからいきなり右手を突き出し稲妻を放つ。狙いは鉄の盾。痺れて棒立ちになったアレフの元まで距離を詰め、居合いで右籠手を打つ。もちろん峰打ちだ。鉄の剣が落ちる。

「ひでえ……。」

「卑怯な！」

外野から非難の声が聞こえた。

「今、卑怯だと言ったやつ前出る！」

人集りのほとんどが顔を伏せ目を合わせない。前に出るやつはいない。

「まあいいでしょう。今私は殺す以外はルール無しとした。もちろん魔物にはルールはありません。今卑怯だと思った者全員死んだと思え。アレフ！お前は卑怯だと思ったか！」

「いいえ。私は師匠の間合いや剣速に気を取られて、魔法の存在を忘れていました。さっきまでその話題をしていたのに。」

アレフは悔しそうに話す。左手で打たれた右手をさすっている。

「よろしい。なぜ負けたか理解できればそれでいい。ここなら次があるからな。手をだせ。・・・ベホイミッ！」

赤く腫れていた右手が元通りになる。

「一本で終わるか。終わりならいつもの練習だ。」

「まだやります。」

「そうか。では次は木剣と木盾を使おう。俺も木剣を使う。ちなみに木の盾ならベギラマは通らん。」

「判りました。同じミスはしません。」

「よし。では合図！」

互いにさっきと同じ様に構える。始まりの合図と共にアレフが飛び込んでくる。俺は合図がなる頃にはすでに抜剣して上段に構えている。盾を前に間合いに入ってきたアレフに木剣を叩きつける。受け止めた盾が真つ二つに割れた。以外な結果に止まったアレフの右籠手に軽く剣をあてる。

「おい！あれか？噂の盾割り。」

「聞いたことがある。近衛のサイモンさんが盾を割られたって。」

ちよつと外野うるさい。問題はそこじゃないんだ。

「さてアレフ。今回の敗因は？」

「木剣で盾が割れるとは思いませんでした。」

「残念、そこじゃない。一番の問題は俺にはお前の行動があらかじめ解かっていた。正直に言つとそう誘導した。ベギラマが使えることを意識するとまず間合いを詰めてくる。しかも事前に木の盾にはベギラマは効かないと教えてある。そうでなければ上段からの渾身の一撃はできない。」

「なるほど、私の動きはケルテン師匠の手の内にあつた。」

「さっきも言つただろう？武器も魔法も使い方だつて。あとわざわざ木の盾を持たせたのはもう一つ理由がある。」

「鉄の盾なら斬れないからですか？」

「いや刀なら斬れるんだ。ただそうすると高くつく。800Gも弁償したくない。」

「本当ですか？はあ、かなわないな。」

「まだいろんな戦法がある。さらに魔物なら人間にできない戦法ができる。」

例えば飛ぶ魔物、メイジドラキーはギラを放ってくる。キメラは火を噴いてくる。がいこつとか鎧の騎士は痛覚も感情もないから多少斬られても平気で懐に入ってくる。近くが毒の沼地でもお構いなし、多分崖なら一緒に落ちるだろうね。あとドラゴンとかゴルドマンとか体の大きさが違いすぎるモンスターには常識は通用しない。」

「まだまだですね。ありがとうございました。いつもの練習に戻ります。」

「よし皆解散。時間のある者どうして模擬戦でもやってみる。多分さっきまでと違う戦いができるぞ。」

俺とアレフは隅によるといつものメニューを始めた。あちらこちらで模擬戦が始まる。今日の訓練場はいつもより活気があるようだ。

模擬戦（後書き）

アレフが皆さんの替わりに質問をします。

勇者ガルドと買取センター

さて今日は勇者ガルドが買い取りセンター（俺命名）に来そうな日である。そういえば支援官になってから行った記憶がない。顔をだしておくか。城の一階にあつたな。

・・・怒られました。

「勇者のレベル評価が貯まってます。一週間も何やってたんですか！？」

「いや連絡はしたよ。勇者52、53、54の勇者資格停止、買取継続と半額の徴収については。」

「それだけでは駄目です。勇者55の買取品の書類が貯まってます。この書類に目を通して現在レベルを決定してください。」

「大丈夫。レベルでの評価なんて知らない、俺の弟子だし。」

俺は一応買取リストを眺めている。ふん見事にスライムとスライムベスとドラキーだけだ。当たり前か。城から半日で移動できる範囲しか行かせてないからね。しっかしまあよくこんな集めたな。結構は多いぞ。それにしても効率の悪い書類だな。素材一つにつき一つチェックを入れるんだ。別途数数えてスライムの核何個って書いておけば見やすいのに。

「それでもレベルを決めて下さい！」

「じゃあレベル3。」

「適当に決めないで下さい。こんなに書類があるんです。そんな低いわけではないでしょう。」

「ふん。書類なんかで何がわかる。それにあいつはできるだけレベル上げてから次に行くタイプだ。おれがそう決めた。」

「言っている意味がわかりません。」

「細けーことはいいんだよ！Lv3、これは決定事項です。異論は認めません。」

「もうそれでいいです。」

「そうだ。今日は多分勇者51ことガルド来るよ。」

「へえ、ちゃんと把握してるんですね。」

「何、その不信そうな目は？」

「文官の間では噂になってますよ。女子供と遊んでばかりいる人だつて。」

まじか。そんなことはないはずだ。勇者3人を落第させただろ。次にアレフを弟子にして、マギーと魔法談義して……。なるほどアレフが子供でマギーが女か。否定できねえ。いやいや、これは竜王討伐を含む壮大な人類補完計画の一部だ。誰かにけちをつけられる覚えはない。大体女と遊んでいるって本人が聞いたら激怒するぞ。

そんなこんなやっているとならありそうな筋肉隆々な男が現れた。ガルドだ

「これを引き取ってくれ。」

ドサツ！と布袋を床に置く。

「いらっしやいませ！当店は初めてご利用ですか？当店のシステムは説明した方がよろしいですか？」

俺は一気にまくし立てる。隣の文官は呆れたような顔で俺を見ている。

「おっおう！そうしてくれ。」

多分調子が狂うのだろう。なんとなく返事をしてしまっている。

「はい！では説明致します。まず持ってきた素材によってEXPポイントとGポイントが付きまします。例えばスライムならEXPポイント1、Gポイント2です。詳細はこちらの紙で確認して下さい。一定以上EXPが貯まると勇者レベルが上がります。7ポイントでレベル2、同じく23、47、110でレベルが上がります。これについてもその紙にありますので確認して下さい。このレベルでどの程度の地域に行けるかの判断材料になります。必要に応じてご相談下さい。相談は無料です。担当は私ケルテンになります。

次にGポイントですが、これはそのままゴールドを受け取れます。また必要分だけ受け取り、残りを貯金しておくことも可能です。

以上理解できましたか？」

「べらべらとうるせえやつだな。別に俺はお前の助言なんぞいらねえ。ゴールドは全部よこせばそれでいい。」

ガルドはこめかみに青筋を立てている。気の短いやつだな。

「では鑑定を行ないます。時間がかかりますのでお待ちいただけますか？または宿に届けることも可能ですが？」

「いや待つ。」

「ではそちらのソファにお掛けになってお待ちくださいませ。」

俺と文官で手分けしてテーブル上に並べる。メイジドラキーの翼膜、おおさそりの毒尾、がいこつの大腿骨、魔法使いの杖。ひどいな。折れたり割れたり素材として半分は使えない。二人で小声で話す。

（なあ。ちょっとひどすぎない？）

（ええ。これなんかわざと折ってあるみたいですよ。数が増えると思ってるんですかね。）

（微妙だね。故意かどうか判断しづらいね。）

（これとこれは同じですね。ほら断面が一致する。こんなパズル嫌ですよ。）

（俺だって嫌だよ。何が悲しくて骨でパズルせにやなんのよ。）

「いつまで時間かかってるんだよ！」

（ちょっと注意してくるわ。正確に続けて。）

俺は申し訳なさそうに話す。

「申し訳ございません。数が多いのと状態が悪いので正確な数をだすのに時間がかかります。また買い取った素材は加工、売却することにより支払うゴールドを得ていますので、次からはなるべく完全な形で納品をおねがいたします。」

怒ってる。怒ってる。手出してくるかな？予想通り俺の襟を掴みに来る。見切ってかわす。やつの体勢が少し崩れた。

「うるせえんだよ！てめえ！……ってなめてんのか！」

「いえ、そんなことはありません。ああちょうど計算が終わったところみたいです。」

俺は文官の所まで歩き用紙を受け取る。もどりながら話す。

「今回はメイジドラキー30匹、大さそり25匹、がいこつ13匹、魔法使い32匹でEXP1966、2383Gとなります。おめでとうございます。レベルが1から9に上がりました。なお次のレベルになるのあと34ポイント必要になります。」

ガルドはゴールドの入った袋を引っつかむと無言で出ていった。

「いやゝ怖かったねえ。短気な人でしたね。」

「なんで笑いながらそんなこと言えるのですか？どうかしてますよ。」

「失礼だな。正常ですよ。」

「もういいです。武官の方の神経はわかりません。最初からわざと挑発したでしょう?」

「わかる?人柄を確認したくてね。ありや駄目かな。次来る時もあるべく立ち会つよ。もし俺がいない時来たら近衛に声かけて立ち会ってもらう様に。いいね。」

「頼まれなくてもそうします。ああいう人は嫌いです。」

「君の評価も参考にさせていただきます。そういえば名前を聞いていませんでしたね。」

「メイヤーです。一応男爵号を持っています。あなたのことは存じてます。ある意味有名ですから。」

「あっそう。これからもよろしく。メイヤー男爵。ではまた来ます。」

「毎日一回は来てください。」

「はいはい。」

俺は背中を向けて軽く手を振ってここを去った。

弑逆未遂事件

さて不愉快なことばかりおきたので気晴らしにマギーのところにでも行こう。

「よお！マギー。はかどってる。」

「駄目っ！邪魔しないで。今いいところなの。」

マギーが顔も上げずにそう言い放つ。

「あっはい。すみません。失礼しました。」

それだけ言うとなんはそつと扉を閉めた。ああなると駄目だ。きつと誰が来たかすら判ってないな。なんか俺寂しい。兎は寂しいと死んじゃうんだよ。嘘だけど。ばやきながら歩いていると何やら騒がしい。

「なりません。殿下と言えどその命令には従えません。」

「黙れ！衛兵ふぜいが殿下に命令するな！」

城の2階への階段前で衛兵2名と貴族風の男7名が問答している。貴族側でしゃべっているのは後ろに立つ3人の内の一人だ。二人の衛兵が鉄の槍を交差させ、通行を妨害している。その前には貴族の護衛と思われる二名、二歩下がって高価な貴族服の男、さらに三歩下がって貴族服三名。

「騒がしいですね。どうしました？ここは場内ですよ。」

俺は間に割り込み衛兵に声をかける。衛兵が少しほっとした顔をする。

「こちらのフレーゲル殿下がここを通せと仰せです。」

フレーゲル殿下？誰だっけ？殿下ってことは王家の誰かだよな。

「いいんじゃない？特に断る理由があるわけでもあるまいし。」

「いえ、護衛の方の武器が……。」

そう指さす。なるほど帯剣してるね。俺は振り返り

「お連れの方の武器を預からさせて頂きます。それでお通しできますか？」

「無礼な！国王様の甥にして王位継承権第3位のフレーゲル殿下に命令するな！」

「そつだそつだ。直答するも恐れ多いぞ！」

ああ、後ろのガヤが五月蠅い。当の本人は見下したような目で俺を見ている。そうか王位継承権第3位ってことはたしか國務大臣の息子で……他にはなんの取り得もない男だったような。

「後ろの方々、少し黙って下さい。今あなた方とはお話していません。それで殿下、先も申した通り武器をお預かりしたいのですが？」

「このフレーゲルの武器を取り上げると言っか。」

「いえ、殿下の武器はかまいません。ですが護衛の方の武器をお預かりすると申し上げております。」

「私の部下の武器は私の武器そのものだ。それでも預かると言うか。」

「ええ、なりません。殿下と言えど遵守して頂きます。」

「貴様、大臣殿の覚えがいいからと増長するな！」

「ふん。貴様など図書館でも大人しくしているがいいわ。」

「おのれ、筆頭魔術師殿もこんな男のどこがよくて。くっ！」

また外野が騒ぐ。なんか個人攻撃に変わったぞ。しかも筆頭魔術師って、ああマギーの言ってた馬鹿ってこいつらのことか？フレールが片手を挙げると外野が黙った。よく調教されているな。

「ではどうしても通さぬというのだな。」

「ええ、どうしても通さぬと申してます。」

「ふん！この馬鹿者をやってしまえ！」

そう言い放つとフレールは3歩下がる。護衛の二人が剣を抜いた。馬鹿か、ここで剣を抜くか！剣を構えた二人が威嚇するように剣を構える。

「引いてもらえませんか？事を構えたくありません。」

「ならば貴様が手を引け。」

これは時間稼ぎだ。この間に思考詠唱でピオリムを二回、さらにバイキルトを自身にかける。

「危ないですよ。そのままだと後ろの人に当たりますよ。」

そう声をかけると思わず二人が後ろを確認する。今だ！抜く手も見せぬ居合い、狙いは鉄の剣。向かって左の男の剣の刃を斬り裂く。さらにかえす刀でもう一人の鉄の剣も斬り落とす。鏗鳴りの音が響いた時、俺がとぼけた声で話しかける。

「面白い剣ですね。刃がありませんよ？」

「なっ！貴様・・・」

真っ赤になったフレーゲルが口述詠唱を始めた。消費MP5の魔法、ベギラマか。間に合え！

「私はMPを5放出する

MPとマナは融合し万能なる力となれる。MPとマナは融合し万能たる力

おお万能なる力よ、雷となる力よ、不可視の力となり

我が敵を、撃て」

よ。）

「ベギラ「マホトーン！」」

何も起こらない。俺が上からかぶせた魔法が効果を発揮した様だ。フレーゲルが手を突き出し口をパクパクしている。

（俺はMPを2放出す

となれ。おお万能た

かの者の魔法を封じ

「衛兵！この者たちを拘束して下さい。」

「しかし・・・」

「私が全責任を負います。拘束して牢屋に入れて下さい。」

騒ぎを聞きつけた近衛騎士達も階段を下りてくる。

「国王、及びに國務大臣に対する弑逆未遂、ならびに城内騒乱罪になります。近衛の方々も手伝って下さい。」

次々に取り押さえられる6人。往生際が悪く暴れているが容赦なく取り押さえさせる。

「父上に会わせる！」

「下郎が！私の体に触れるな。」

騒がしい声が遠ざかっていく。衛兵が引きずる様に連れて行く。

- - - - -

俺の前に不機嫌な國務大臣と近衛隊長がいる。

「これはどういうことだ。説明せよ。」

「はっ！かの者達が帯剣したまま2階への通行許可を求めました。拒否したところ抜剣、さらに魔法の行使を行いましたので身柄を拘束しました。なにか不都合がありますか？」

「何が不都合だ。あれは私の息子だ。それでもか？」

「大臣、いけません。この者の言が正しい。我が国にはこの者を罰するいかなる法もありません。」

「しかし・・・」

ここで俺が口を挟む。

「よく考えて下さい。さきの者は自称王位継承権第3位です。その者が国王様と継承権第2位の大臣、あなたがいるここに武器を携えてくる、ということは反逆の恐れがあります。ローラ王女が行方不明の今あなた方がいなくなれば、かの者が国王になれるのです。」

「なっ！私の息子であるフレーゲルが私を殺しに来るわけがなからう。」

「残念ながら私はあなたの息子の顔を存じ上げません。自称の称号や名前を信じて法を犯させるわけにはいきません。さらにそういった前例は枚挙に暇がありません。弑逆という言葉があるぐらいですから。それに今は平時ではありませんから、最悪を想定して行動すべきです。王女が誘拐された前例があります。」

隣で近衛隊長が声にならない声を上げる。

「この件は国務大臣にお預けします。そのかわり絶対につやむやにはしないで下さい？」

「ではどうせよというのだ。」

「そうですね。まずは不見識な行為に対する叱責、さらに一ヶ月の

登城自粛といったところですか？またこの件は公にはするが公文書には載せない。これで大臣の面目も立つでしょう。」

大臣が苦虫を噛み潰したような顔をしている。それでも妥協した方だぞ。汚名返上、名誉挽回のうまい手だと思っただが。

「判った。そなたの言うとおりにしよう。」

がつくり肩を落とす大臣。俺と近衛隊長が退室する。かける言葉はない。

――

「しかしお前。何をした？見ていたはずの衛兵もはつきりせん？」

歩きながら近衛隊長が質問する。そうか、見えなかったか。狙い通りだ。

「ただ剣を斬り飛ばして、ベギラマをマホトーンで封じただけですよ。」

「軽く言ってくれる。お前以外の誰にもできぬだろう。まあいい。一部の増長した者共もしばらくは自重するだろう。」

「だいいいですけどね。」

「しかしまあお前、損な役回りをする。本当は俺の役割だ、すまん。」

俺に頭を下げる。

「理解してくれる者がいるなら、それほどでもありませんよ。」

この人は敵にまわしたくない。数少ないそう思える人だ。

弑逆未遂事件（後書き）

なんの捻りもありません。あの人です。

一部修正しました。指摘ありがとうございます。

最悪な一日の終わり

自室に戻り革の服と刀を放り出し、ベッドに大の字になる。目を瞑る。疲れた。今日は不愉快なことだらけだった。正々堂々を旨とした騎士、増長した貴族、降って沸いたうまい話に浮かれる平民が無理もないか。400年の平和だ。きつと竜王さえ倒せばまた平和が訪れると思ってるのだろ。うな。上から下まで平和は他人任せ・・・。竜王亡き後の時代は開拓の時代。無能な者は置いていかれる。ラダートム王家も例外じゃない。いずれ辺境の一王家にすぎなくなる。いつそのことそう言ってやりたい。誰も信じてはくれないか・・・。だめだ。ネガティブになっている。夕飯ぐらい豪勢にするかな。

コンコン。控えめなノックの音が部屋に響く。

「いる？私よ。」

ああマギーの声だ。ほっとする。

「ちよつといるんでしょ！返事ぐらいしなさい。入るわよ。」

かつてに扉を開けて入ってくる。前言撤回。ほっとはしない。

「じゃあ立って、出かけるわよ！」

俺の手を取って強引に引っ張る。あわてて刀だけ掴んで引きずられていく。

「ちよつ出かけるってどこに？もう8時だぜ。」

「いいからいいから。とりあえず屋外に出ればいいから。」

・・・屋外？兵舎から外にでる。何人かに見られていたような気がする。

「さうで、よく見てなさいよ。」

マギーの周りのマナが変化する。おい魔法を使うつもりか？マホトーン・・・いや間に合わない。やばい。一瞬景色が失せ、気づくと湯気に見える村の外に立っていた。

「マイラ・・・か？」「やったあー！できたできた。やっぱりマイラのことだった。」

マギーが両手を広げてくるくる回っている。俺はあっけにとられている。

「何？俺を実験に付き合わせたん？」

「そうよ。なにかあったら困るでしょ。そうだっ！」

返事をほったらかして走るマギー。村の入り口の大きな岩。花が捧げられている。

「基準石ってこれね。レミ・ラ。うん確かに書いてあるわね。温泉の村ってセンスないね。」

そこまで言っていると俺の方に振り返って胸を張る。

「どう？ルーラは解読したわよ。」

「はあ。そうみたいだね。」

俺はため息をつく。

「なにそれ。もっと驚くとか喜ぶとかしなさいよ。」

「いや十分驚いた。大したもんだ。」

「もうもつと褒めなさいよ。じゃあ行くわよ。」

「えっどこに？もしかしてリムルダール？メルキド？」

「なによそれ、ここはマイラ。温泉以外にどこ行くっていうの？」

再び俺の手を引っ張るマギー、いま多分俺はにやけているだろう。
不愉快な一日の終わりは最高だった。

- - - - -

翌朝、俺は隣のマギーを起こさない様にそっとベッドから出る。
こんな時でも同じ時間に起きてしまう。刀を手にとって外へ・・・

「ねえ！どこへ行くの？」

「ゴメン。起こした？いつものトレーニングさ。やらないと調子が悪くなるから。」

「そう・・・じゃあ。私は見てる。ちょっと待ってて。」

マイラの町の北側、木がまばらに茂る場所で俺が刀を振る。切り株に座ってじっと見つめるマギー。気になってしょうがない。いかん、平常心だ。無心で刀を振る。もう視線は感じない。

「よし、これで終わりだ。ごめん、退屈させた？」

「いいえ、楽しませてもらったわ。やっぱりすごいよね。で鉄の剣を斬ったって本当？」

「なんだ、君の耳にも入ってたんだ。本当だよ。」

そうか。昨日の一件で俺が落ち込んでいると思って、ここへ連れてきたんだ。ルーラの披露も踏まえて・・・。

「これも伝説の名剣？一体何でできてるの？」

「違うよ。ここで作ってもらった。材質は鉄と鋼の二層構造だった。今はさらにミスリルを含む三層構造。」

マギーが首を傾げる。気づいたかな。

「入手も加工もできないはずのミスリルが使われてるの？」

「まあ説明が長くなるからまた今度ね。まだ魔法の解読終わってないでしょ？」

「まあいいわ。魔法が一段落したらまた聞くことにする。」

少し脹れている。

「じゃあチェックアウトして城に帰ろうか？」

「ルーラは私が使うわ。リムルダール、メルキド経由で。」

「まだ実験する気？」

「駄目？」

「そんなことないけど。」

「……………俺達にとってはたわいのない話をしながら宿屋に帰る。」

- - - - -

私の横でケルテンが安らかな顔で眠っている。

さつき部屋で見た時ひどい顔をしていた。この人かなり無理してる。私はわがままを利用して慰める。今は道化でもいい。

最初は何でも知っているような顔にむかついた。武官のくせに！でも本当に私の知らないことまで知っていて、しかもそれを惜しげもなく教えてくれる。まるで子供を教え導くように…………。

いつからだろう？一番大事な人と気づいたのは。多分あの開かずの間が開いた日。そうあの開かずの扉は私の閉ざされた心の扉。格式や身分しか重要視しない貴族の子弟、正々堂々にこだわる騎士、全て馬鹿にしていた私の心を真正面から開放した。

強大な力を持っている。だけどそんなことなんでもないこの様

に言つてのける。誰にでもできることだつて。私は武器は持てない。じゃあ私はこの人の知識だけでも追いついてみせる。でも力の使い方とは間違わない。それができるようになったら本当の意味で横に立てる気がする。今はその背中を追いかけるだけでいい。

おやすみ、ケルテン。あなたに安らぎがありますように。

勇者アレフの成長

5 / 10 勇者支援生活 10日目

毎朝の教練である。昨日はここには来れなかったものでちょっと気恥ずかしい。一昨日はここで説教したせいかいつもいる兵士や見習いが俺を見てこそこそ何か話している。人の噂をするなら聞こえない所でしてくれないかな。

アレフがいつもと違っていきなり抜き打ち、縦切り、納剣の練習を始める。シュツ、シュパツ、シャキン！10回くらい繰り返す。いい音をしている。なるほどね。

「ああ判った、判った。できるようになったって言いたいんだな。」

「できてますか？じゃあ・・・」

何か期待するような目で俺を見ている。

「次の準備するから少し待ちなさい。」

俺は自室に戻り、支給品の鉄の鎧を持ち出した。

「これを着なさい。」

「頂けるのですか。」

「違うよ。やっぱり貸すだけだ。いつものメニューをそれ着たままやるんだ。それが問題なくできるようになったら剣に関しては教え

ることはもうない。」

アレフは目を輝かせながら鉄の剣を振り始めた。流石に流れる汗の量が半端じゃない。今日は自分のメニューが終わっても帰らない。最後まで見ていることにした。体を冷やさないように汗を拭き待つ。

「はあ。はあ。はあ。終わった。」

アレフがしゃがみこんで休む。

「いずれその装備で外へ出るんだぞ。ばててるようじゃまだまだだ。でも俺は優しいからな。直してやる。ベホイミ！」

「ありがとうございます。ずっと楽になりました。でもすごいですね。」

「なにが？ベホイミ？」

「違います。よく無詠唱で魔法が使えますね。」

「ああ、それね。悪いが誰かが魔法を使用するために口述で詠唱したら、第一小節の時点で何使つかわかるぞ。」

「ええっ！本当ですか？」

まあ驚くか。まだアレフはホイミとギラしか使えないからパターンに気づいてないだろう。

「本当だ。だから口述詠唱でなく思考詠唱を推奨する。だから魔法の名前だけで呪文が完成したように見える。これはロト一行が当た

り前にやってたことだ。」

「まだまだですね。」

「では飯食ったら、魔法の学習だ。ベギラマが使用できるまでは午前中は魔法の練習をしよう。」

「はい楽しみです。もう一つ質問いいですか？」

「何？」

「一昨日の夜は筆頭魔術師殿といっしょだったんですか？」

思わず口に使っていた水を噴き出した。周りでこそそこそそしていたやつらが手を止めてこちらを注目している。

「プツ、プライベートな質問には答えられない。」

まずい、ごまかしきれていない。

『ウワン！本当だったんだあー！俺あこがれてたのにー！』

誰かが泣きながら走りさっていった。その辺、ざわざわするな。

- - - - -

「お前なあ。あそこであの質問はないんじゃないか？」

食事中、肉をつつきながら文句を言う。

「どうしても聞いてほしいと昨日言われまして、断れずに・・・すみません。」

「もう済んだことだ。もうやるなよ。ちなみに魔法の先生はその筆頭魔術師殿だ。」

「いいんですか？」

「なにが！別に魔法を教えることぐらい俺がとやかく言うことじゃない。」

「わざわざ筆頭魔術師殿に教えてもらえるってことですよ。」

「あつ！やられた。お前策士になれるよ。」

「やった。初めてケルテン師匠から一本取りましたよ。」

俺は頭を抱えた。

- - - - -

図書館である。初めて二人を会わせる。なんで俺がこんなに緊張しなきゃならんのだ。

「あゝマギー。こちらが勇者アレフ。しばらく魔法の先生をお願いしたい。」

そしてアレフ、お前は知ってるな。筆頭魔術師のマギーだ。」

「ケルテン師匠の弟子アレフです。筆頭魔術師どのに魔法の指導をして頂けるとは光栄です。」

「王立図書館司書のマギーよ。．．．ちよつとケルテンこつちへ．．．」

（なに？聞いてないわよ。どういうこと、説明しなさいよ。）

マギーが俺の手を引き隅に行く。しゃがみ込んで小声で話す。

（さつき決めた。俺が教えるより君が教えた方がいい。）

（どういう意味。あなたの方が教えるの上手でなくて？）

（そうでもないと思うけど．．．それより人に教えることで初めて気づくことがあったりするんだ。多分だけど今例の魔法書、行き詰っているでしょ？）

（何でわかるの？）

（わかるさ。マギー君の事ならね。まあ騙されたと思ってお願い。）
（しょうがないわね。いいわ。やってあげる。）

（とりあえず魔法の思考詠唱から、最終的にベギラマまで使えるようにしてくれ。例の詠唱文の意味も説明もしていいから。魔法の授業は朝9時から昼12時までの3時間。じゃあ頼んだよ。」

何も無かったようにマギーがアレフの前にもどる。

「はあ、いい、私はマギー。筆頭魔術師なんて他人行儀な呼び方止めてね。」

「はい。ではマギー先生。よろしくお願いします。」

「なんか素直でいいわあ。こんな生徒今までいなかったわ。でも私の指導は厳しいわよ。」

「望む所です。」

- - - - -

例の黒板を出してマギーが板書始める。10種の魔法を並べて書く。順番に魔法を指し詠唱文の共通点などを説明する。アレフがしきりと感心している。途中マギーがアツと叫ぶといきなり魔法書を10ページほどパラパラめくる。

「ごめんなさい。続けるわね。」

続きが再開される。任せておいても大丈夫だろう。俺は確信した。

どうやら気づいたようだね。あの魔法書にはからくりがある。最初の10ページは今の魔法が順番に書いてある。それだけわかれば・・・まあ頑張れよ。

俺は背中を向け、右手を上げひらひらさせながら出て行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1157y/>

勇者って一人じゃないんですか？

2011年11月8日03時06分発行